

VIEW21

ビュー21

2013

Vol. 3

中学版

特集

1人で学べる生徒を育てる

学校事例 秋田県大仙市立西仙北中学校 / 富山県富山市立速星中学校

香川県多度津町立多度津中学校 / 東京都鷹南学園 (三鷹市立第五中学校・中原小学校・東台小学校)

高校生の声 私の中学校での学習、高校での学習

インタビュー 京都教育大准教授 伊藤崇達

私を育てた
あの時代、あの出会い

生徒に寄り添い、信じる大切さを学んだ初任校での日々
高知県高知市立城東中学校校長 田中敏彦

Benesse発
これからの教育

21世紀型スキル育成にタブレットPCを活用 東京都豊島区立千川中学校

ミドルリーダーの挑戦
一前へ! 前へ!!

生徒一人ひとりの内面に寄り添い続け、個々の良さを伸ばしていきたい
大分県豊後高田市立高田中学校 堀之内健治



特集

3 1人で学べる生徒を育てる

4 課題整理

1人で学べる生徒を育てるために
どのような課題があるのか

6 学校事例1

「1人勉強ノート」で、自分で考えて学習する習慣を付ける
秋田県大仙市立西仙北中学校

10 学校事例2

「無監督テスト」を実施。信頼関係を土台に主体性を育む
富山県富山市立速星中学校

14 学校事例3

毎週の小テスト、毎日の学習計画立案で、家での学習を意識化
香川県多度津町立多度津中学校

18 学校事例4

地域や保護者と共に、自ら率先して学ぶ生徒を育てる
東京都鷹南学園（三鷹市立第五中学校、中原小学校、東台小学校）

22 高校生の声

私の中学校での学習、高校での学習

24 インタビュー

「共に学び合う」「1人で学ぶ」を繰り返し、
メタ認知能力を高める

京都教育大准教授◎伊藤崇達

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い

生徒に寄り添い、信じる大切さを学んだ初任校での日々

高知県高知市立城東中学校校長◎田中敏彦

28 Benesse発 これからの教育

21世紀型スキル育成にタブレットPCを活用

東京都豊島区立千川中学校

30 ミドルリーダーの挑戦 —前へ!前へ!!

生徒一人ひとりの内面に寄り添い続け、個々の良さを伸ばしていきたい

大分県豊後高田市立高田中学校◎堀之内健治

32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

私を育てた
あの時代、あの出会い

第15回

生徒に寄り添い、信じる大切さを 学んだ初任校での日々

高知県 高知市立城東中学校校長 田中敏彦 TANAKA TOSHIIKO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、田中校長が語る。

生徒の表面的な姿ではなく
その背景を知ることが大切

私の教師としての原点は、中学時代の経験にあります。ソフトボール部の顧問で、冬は駅伝部の顧問もされていた石川和先生は、授業も部活も一生懸命な先生でした。生徒がケガをしないようにと、練習前には一人ですoftボールのグラウンド整備をされていました。生徒に親身に寄り添うのが当たり前という先生で、生徒が主役で教師は黒子というスタンスでした。これが、私の目指す教師像の原型となっています。

しかし、実際に教師となり、その理想を体現する難しさを、私は初任校でまざまざと感じました。その学校は荒れの状態にあり、それが長く続いていたため、生徒の問題行動が常態化し、教師のどんな言葉も生徒の心に届かなくなっていたのです。そうした中、赴任されたのが中尾良孝校長です。先生はまず「生徒に寄り添いなさい。だまされ、裏切られても、生徒を信頼してください。生徒の問題行動だけを見るのではなく、その理由を探るために、常日頃から生徒と接することが大切なのです」と言われました。その言葉に私



たなか・としひこ 専門教科は社会科。高知市立一宮中学校、高知市立三里中学校、高知市教育委員会指導主事、高知県教育委員会学校教育課指導主事、高知市立三里中学校校長などを経て、現職。

1977 (昭和52)
高知市立一宮中学校
に新採で赴任。
赴任6年めに
中尾良孝校長が着任

1988 (昭和63)
高知市教育研究所
研修主事に着任

1990 (平成2)
高知市立三里中学校
に赴任

1994 (平成6)
高知市教育委員会
指導主事に着任

1997 (平成9)
高知県教育委員会
学校教育課
指導主事に着任

1999 (平成11)
高知県教育委員会
学校教育課
義務教育指導班長
に昇任

2002 (平成14)
高知県教育委員会
学校教育課課長補佐
に昇任

2003 (平成15)
高知市立三里中学校
に校長として赴任

2004 (平成16)
高知市立城東中学校
に赴任

「どんな生徒の心にも火をつけ、 興味・関心・意欲を引き出す」



は中学時代を思い出し、昼休みは生徒と遊び、放課後は部活動と一緒に汗を流し、休日には生徒がいそうな場所に足を運びました。そうして、学校以外の生徒の姿を知ろうとしたのです。

中尾校長は、そんな私に生徒会担当を命じました。私は、教師主導ではなく生徒会が中心となって学校改善を進めること、それを定着させて学校の伝統にすることを目指しました。クラスや学校を1つの社会と捉

え、この社会で起る生徒の問題は、生徒が主体となって考え、解決していく。教師は生徒の活動を黒子となって応援するというスタンスです。これは、中学時代の恩師、石川先生から学んだことです。

毎土曜日、生徒会役員と昼食を食べながら、今週の反省と次週の方針を話し合いました。生徒会の中に徐々にリーダーが育ち、主体的に考えて行動できるようになりました。県外研修で視察した中学校を見習っ

て、生徒会活動の進め方も変えました。年間目標と学期目標を立て、学期末に振り返り、次学期の目標と計画を立てるサイクルにしたのです。更に、年度ごとの活動を冊子にまとめることで、活動を「見える化」し、積み上げる構造にしました。

全校集会の進行も生徒会に任せました。私語が聞こえたら教室前の整列からやり直すというルールで、しつこいくらい、根気強くやり続けました。うまくいかなくても、すぐに解決策を指示せず、生徒の問題として生徒に返して考えさせました。

中尾校長の赴任から3年が経った頃には、新任教師でも授業が成立するほど、学校は落ち着きました。

生徒が変わると信じて 努力するのが教師の使命

それから数十年を経て、本校に校長として着任した時、学校は初任校と同じような状況でした。しかし私は、時間は掛かって、この荒れの状態から必ず立ち直ることが出来ると信じていました。教師全員で生徒たちと向き合った結果、5年後に荒れは収まり、学校は落ち着きました。生徒指導の負荷が軽くなってか

ら、学力向上にも取り組んでいます。家庭での学習が難しい生徒が多いので、放課後と長期休業中は毎日、自習室を設けています。校内にも勉強できる環境を設け、「勉強することが当たり前」という雰囲気づくりをしています。

最近、「城東中が変わった」。問題行動が起きなくなった」とうれしい声を耳にするようになりました。でも、荒れが収まり、問題が起きなくなったからといって、良い教育が出来るには限りません。教師と生徒との間に信頼関係が構築できて初めて、良い教育が成り立ちます。

どんな生徒でも学習し、成長したいと願っています。「あの生徒は学習意欲がない」と教師が諦めてはいけません。どんな生徒の心にも火をつけ、興味・関心・意欲を引き出すのが教師の役割です。生徒は、筋道立てて分かりやすく教えてもらうことを望んでいます。時間を掛けて学べば、理解できる生徒は多いのです。生徒に親身に対応することが、生徒を変え、学校を変える。どんな時も生徒に寄り添い、生徒を信じる大切さをこれからも伝えていきたいと思えます。

1人で学べる 生徒を育てる

文部科学省「平成25年度全国学力・学習状況調査」の結果によると、家庭で授業の復習をする中学生の数は増加している。

しかし、学校現場の先生からは

「主体的に学びに向かう生徒を育てるのは難しい」という声は絶えない。

学校の授業だけでなく、授業外でも

生徒自身が主体的に学べるようになるには、

どうすればよいのだろうか。

中学校時代の学習の思い出

◎小学校では授業の中での調べ学習が結構ありましたが、中学校ではほとんどありませんでした。週1回でもあれば、興味の幅が広がったのではないかと思います。
(公立高校2年 黒木水月さん)

◎今振り返ると、中学校の最初で、数学の基礎をもっと頑張っておけば、ここまで数学が苦手にはならなかったのではないかと思います。また、授業でもっと教養を教えてほしかったと思います。

(私立高校3年 川原大洋さん)

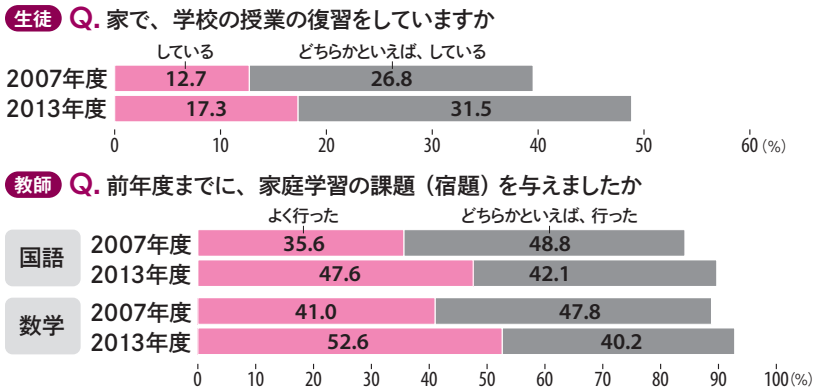
*本誌「高校生の声」(P.22～23)から抜粋

1人で学べる生徒を育てるために どのような課題があるのか

P.6から紹介する学校事例、高校生の声、研究者のインタビューを基に、その解決策のポイントをまとめた。

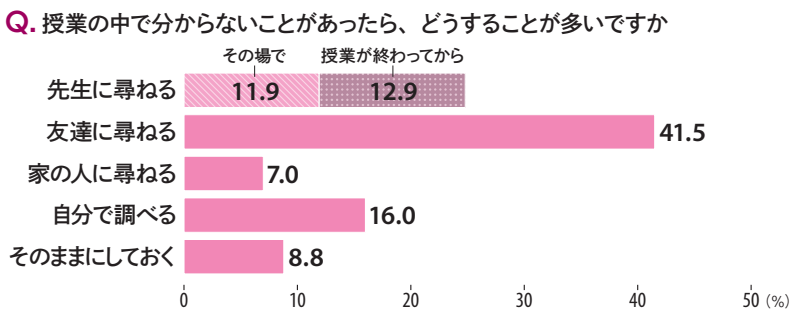
データに見る中学生の意識

図1 家庭学習の定着が着実に進んでいる



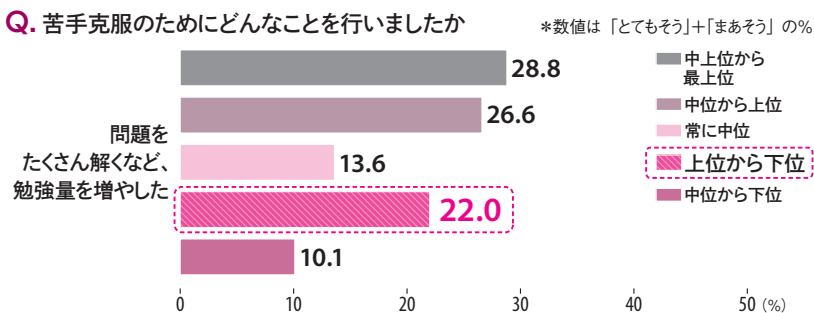
出典／文部科学省「平成25年度 全国学力・学習状況調査 報告書 質問紙調査」(2013)

図2 授業中、分からないことがあってもそのままの生徒は約9%



出典／文部科学省「平成25年度 全国学力・学習状況調査 報告書 質問紙調査」(2013)

図3 勉強量を増やしても必ずしも成績には結び付かない



出典／ベネッセ教育総合研究所「中学1年生の学習と生活に関する調査」(2012)
*上記の分類は、中学1年生1学期の成績から1年生終了時までの成績変動の自己評価によるもの

図1のとおり、家庭学習に取り組む中学生の割合は増加している。しかし、図2を見ると、授業で分からないことを「自分で調べる」と回答した中学生は16%であり、「そのままにしておく」は約9%だった。多くの中学生は、分からないことを先生に尋ねたり、友だちに聞いたりしているようだ。また、図3からは、勉強量を多くしたからといっても、必ずしも学力向上には結び付いていない実態もあることが分かる。

1人で学べる生徒を育てる

課題解決の糸口

1人で学べる生徒を育てるためには何がポイントとなるか？

各校の取り組みに見るポイント

秋田県大仙市立
西仙北中学校

▶P.6

「生徒に現実的な目標を提示して、まずは毎日机に向かうことを促す」
「生徒の意欲を刺激するような良質の問いを与えられるかがポイント」
「成績下位層の生徒には『これさえやってあげれば大丈夫』という安心感を与えること」

富山県富山市立
速星中学校

▶P.10

「学習の見通しを持たせることで、生徒と教師の信頼関係を強める」
「きちんと取り組めば何か成果につながっていくことが明確な教科ほど、生徒は主体的に学習に向かっていく」

香川県多度津町立
多度津中学校

▶P.14

「Plan-Do-See の流れを生徒に体感させることで、行き当たりばったりではなく効果的な学習を自分で行えるようにする」
「家庭学習の内容をテストに結び付けることで、自分で学習することの有用感を持たせる」

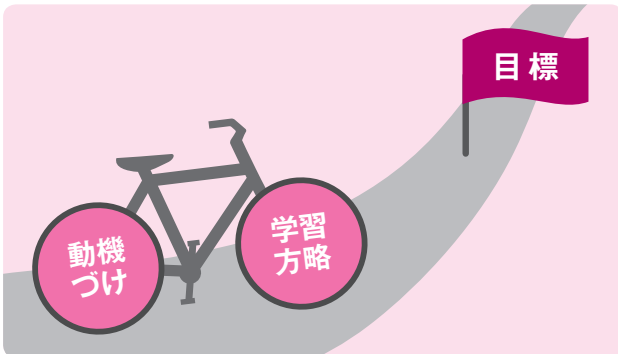
東京都鷹南学園
小・中一貫教育校

▶P.18

「(生徒同士による予想問題作成で) 良い予想問題を (生徒自身が) 作ると他の生徒から褒められるので、そのうれしさを主体的学習につなげる」
「教育は人が行うもの、その『人』に地域のさまざまな方が入っていることは、子どもの学ぶ意欲を支える大きな力になっている」

学習方略の指導で学習の質を高める

1人で学ぶための3つの要素の関係



1人で学ぶためには、目標、動機づけ、学習方略の3つの要素が必要
*京都教育大・伊藤崇達准教授の示唆を踏まえ、ベネッセ教育総合研究所で作成

学習方略の具体的な内容

情意面の学習方略

- 整理方略 … 色ペンできれいに書き込む
- 社会的方略 … 友だちと共に勉強したり相談したりする
- めりはり方略 … 遊びと勉強のめりはりをつける
- 負担軽減方略 … 得意なところから始める

認知的側面の学習方略

- リハーサル方略 … 何度も繰り返して覚える
- 精緻化方略 … 既知情報と関連させる
- メタ認知的方略 … 自分の間違いから教訓を引き出す
- 外的リソース方略 … 図や表を効果的に活用する

学習方略は、大きく「情意面の学習方略」と「認知的側面の学習方略」の2つに分けられる

*京都教育大・伊藤崇達准教授の示唆を踏まえ、ベネッセ教育総合研究所で作成

▶インタビュー P.24

編集部から

今号は、前号「生徒の心には火をつける」と同様に、生徒の主体性の育成をテーマとしました。

各校の取材を通じて、「1人で学べる」生徒の育成は、学校教育の最大の目標ではないかと強く感じました。また、P.4の図2に示されているとおり、授業で分からないことを、自分で調べて解決する生徒は2割に達していません。多くの生徒は、先生や友だちに尋ねながら、問題解決をしている姿が浮かび上がりました。

そうした実態を踏まえると、家庭学習も、まずは自分1人で勉強していても「1人じゃない」と感じられるような工夫をどう行うかが、「1人で学べる」生徒を育成するための鍵ではないかと考えます。

同時に、P.4の図3で示したとおり、勉強の量をこなすだけでは、必ずしも学力向上に結び付きません。一人ひとりに合った質の高い勉強方法をどう身に付けるかが、もう1つの課題ではないでしょうか。

ベネッセ教育総合研究所
情報編集室室長

小泉和義

「1人勉強ノート」で、自分で考えて学習する習慣を付ける

秋田県 大仙市立西仙北中学校

文部科学省「全国学力・学習状況調査」で県の平均が全国上位の結果を収め続ける秋田県。その東南部に位置する大仙市立西仙北中学校では、県平均よりも学習時間が少ないことが課題だ。「1人勉強ノート」や成績層に応じた指導で、自ら課題を見付け、解決できる力の育成を図っている。

●背景

授業態度が良いが 家庭学習時間の少なさが課題

大仙市立西仙北中学校は、2012年度、市内の近隣2校が統合して開校した学校だ。緑豊かな田園地帯に囲まれた丘陵上に立地し、落ち着いた学習環境の中で「学び合い 支え合い 高め合い」を目標として、生徒は切磋琢磨している。

生徒は総じて素直で、話を聞く姿勢も身に付いており、学力にかかわらず真面目に授業に取り組む。13年度に入り、チャイムを鳴ら

さない「ノーチャイム」を実践しており、生徒は、8時20分には担任が来なくても朝読書を始め、授業開始時刻には着席して教師を待つ。

地域に塾が少ないこともあり、塾に通う生徒は1学年に数人だ。また、保護者は学校の教育活動に協力的で、PTA総会や部活動の支援、校内の奉仕活動などに積極的に参加している。

生徒は、基礎・基本にはきちんと取り組むが、応用的な問題には積極的に取り組まないという。家で全く机に向かわないという生徒はいないが、2時間以上学習する生徒の割合が少なく、平日の家庭学習時間は県平均より

School Data

◎2012（平成24）年に西仙北西中学校と西仙北東中学校が合併して開校。「立志 善心 叡智」を校訓に掲げる。学び合いによる「つなぐ授業」の実践、表現力の向上、小中連携などの諸改革に取り組む。



校長◎佐藤心一先生

生徒数◎207人 学級数◎9学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒019-2112 秋田県大仙市刈和野字田中蟻塚12

TEL◎0187-75-2200

URL◎<http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~ns-nishisenbokyutyu1/>

公開研究会◎2013年11月14日（木）

も少ない。

学力方面では、文部科学省「全国学力・学習状況調査」のB問題の正答率が県平均を上回る一方、基礎的・反復的な内容を問うA問題の正答率が低いという。考える力や判断力は育っているものの、漢字や計算問題など基礎・基本の定着が課題となっている。

●家庭学習指導の工夫

内容は任せて、毎日、自分で考えて取り組ませる

家庭学習の習慣化を図るために、同校では、学年ごとに最低限取り組むべき学習時間と分

1人で学べる生徒を育てる

量を設定している。1年生は80分、2年生は90分、3年生は100分だ。佐藤心一校長は、この時間の目標についてこう説明する。

「家庭学習時間の目標を2時間以上にしても、生徒にとってハードルが高く、実行できないでしょう。でも、3年生でも100分であれば、学習が苦手な生徒も出来ると思えるはず。生徒にとって現実的な目標を提示して、まずは毎日、机に向かうことを促しています」

同校の家庭学習指導の特徴の1つは、「1人勉強ノート」の活用だ。宿題以外に、生徒がそれぞれ自分で学習内容を決めて取り組むというもので、規定の分量は、1年生がA4判で1ページ分、2年生はB5判で2ページ分、3年生はB5判で1ページ以上で、自分の課題に応じて取り組むことになっている。ノートは毎朝、担任に提出。担任はアドバイスを励ましなどのコメントを書いて、放課後までに返却する。

学習内容は生徒によってさまざま。その日の授業で学んだ内容を「1人勉強ノート」に改めてまとめ直す生徒もいれば、大きな文字で漢字を数個書くだけの生徒もいる。それほどの違いがあっても、内容は問わない。なぜなら、いちばんのねらいは家庭学習の習慣化にあるからと、2学年担任の佐々木慎太郎先生は説明する。

「生徒が毎日取り組み、ノートを提出すること自体を評価しています。基本的な内容の

反復学習であっても、自分で課題を決めて実行することに意味があると思うからです。きちんと定着すれば、定期考査で少なくとも6割は得点できます。繰り返して取り組む、粘り強さを身に付けることが、高校入学後の学びにも生きてくると考えています」

1年生のある生徒は、ノートに「めあて」を書いてから取り組み、最後にその日の学習内容を自分で「評価」していた。例えば、「めあて」光合成と呼吸の関係について分かりやすくまとめる」「評価」A 分かりやすくまとめることが出来た」など、学習の目標と達成状況を明示し、次の学習に結び付けようとしていた。

また、7、12月には「家庭学習強調週間」



写真1 3年生の「1人勉強ノート」で優秀なものを壁に貼って公開する。生徒間で学習方法を共有することで、高め合う意識を喚起するのねらいだ

大仙市立西仙北中学校校長
佐藤心一 さとう・しんいち
「先生方には、全ての生徒と一緒に考えられるような、良質の問いを授業で投げ掛けてほしい」

大仙市立西仙北中学校
今野悦子 いまの・えつこ
研究主任。国語科担当。「授業では「知の提供」を心掛け、もつと学びたいという生徒の意欲を喚起したい」

大仙市立西仙北中学校
佐々木慎太郎 ささき・しんたろう
2学年担任。数学科担当。「自分さえ良ければ良いではなく、互いに高め合う意識を持った生徒を育てたい」

を実施し、2週間分の学習計画を立てさせて、毎日、前日に取り組んだ内容と時間を記録させる。

長期スパンの宿題で計画の大切さを意識させる

「1人勉強ノート」も宿題も、提出は厳しくチェックする。提出するまで部活動には加させないという方針を、教師全員で共有し、部活動顧問とも連携して、最後までやり切らせることを徹底している。美術科や家庭科などの実技教科も同様である。

宿題は締め切りを1か月後にするなど、十分に時間を設けて取り組みませる場合が多い。提出物を忘れがちな生徒は、期限間際になっ取り組み始めることもあるため、教科担任

が日頃から「きちんとやっているか」などとこまめに声を掛ける。

宿題の提出期限に幅を持たせるのは、生徒が自ら先を見通して計画し、物事を進める力を身に付けてほしいというねらいもある。研究主任の今野悦子先生は次のように話す。

「もし家で出来なければ休み時間を使っても終わらせるなど、自分で進行を管理する術を身に付けてほしいと思います。すき間の時間を上手に見付けて取り組む生徒もいれば、宿題をため込んでしまう生徒もいます。定期考査や長期休業の前には、学習計画の指導を徹底するなどして、計画的に学びに向かう力を高めていきたいと考えています」

●授業の工夫

授業最後の演習問題でその日の理解度を自己採点

主体的に学びに向かわせるには、生徒に自分の力を自覚させ、学習しなければならぬという意識を持たせることも大切だ。

例えば、数学では授業の最後の15分を使い、その日の復習プリントに取り組ませ、授業の理解度を確認させる。

生徒はまず、授業の復習的な内容となる「評価問題」に取り組み、その場で答え合わせを行う。評価問題は授業で扱った問題の数字を変えただけの基礎的な問題だ。

「評価問題が解けないまま家に帰すのは教

師として責任を感じるので、出来なかった生徒には授業が終わるまでの15分間に、徹底的に指導します。生徒には少なくとも評価問題が解ければよいと伝え、成績下位層の生徒に『これさえやっておけば大丈夫』という安心感を与えています」（佐々木先生）

プリントは成績上位層のための「チャレンジ問題」も用意しておき、時間内に評価問題を解き終えた生徒は、発展的な問題や次に学ぶ単元の問題に取り組む。「チャレンジ問題」は1人で解いても、周りの生徒と相談しながら取り組んでもよいことにしている。解答も一緒に渡しているため、「どうしてこうなるのか」と相談しながら意欲的に問題に取り組む生徒もいるという。

成績上位層がけん引して皆で高め合う意識を醸成

成績上位層は、他の生徒をサポートする役割も担う。「評価問題」が終わった生徒が他の生徒に教えに行く時は、机の上に自分のノートを広げておき、どのように「評価問題」や「チャレンジ問題」を解いたのを見られるようにしておく。計算式の途中に「立式」「有理化」「素因数分解」などと書いておけば、周りの生徒はそのメモを参考にしながら、自分の問題を解き進めることが出来る。早く終わった生徒は、遅れている生徒を直接指導するだけでなく、自分のノートで他の生徒も助

けることになるのだ。

「分らない子が理解できるように説明できてはじめて、本当の力が付いたといえるのではないのでしょうか。成績上位層の生徒には、聞かれたら教えてあげよう、人が見て分かるノートを書こうと何度も呼び掛けて、皆で高め合う意識を浸透させるようにしています」（佐々木先生）

人を助けることが自分にも返ってくる。そうした意識を浸透させることで、学び合う集団が形成されていく。同校が課外授業以外で習熟度別授業を設けないのは、学び合いから生まれる刺激を重視しているからだ。

「良い発想が出るかどうかは、必ずしも学力とは関係ありません。学び合いを通して、出来る生徒が他の生徒から学ぶこともありま

す。互いに学び合う気持ちさえあれば、学力差は生徒にとってはかえって良い刺激になると考えています」（佐藤校長）

●夏休みの課外授業の工夫

自分でコースを選び実力を客観視させる

夏休みには課外授業を行うが、学力向上をねらう以上に、生徒の意識啓発を行う意味合いが大きい。「数時間の学習ですぐに学力が上がる」とは期待していません。自分の実力を自覚し、もっと学習しなければならぬという意識を持たせることも、課外授業のねらい

1人で学べる生徒を育てる



写真2 夏休み課外授業の「ベーシック」クラスの様子。普段の授業で高校の入試問題に取り組むのは時間的に難しいため、夏休みを利用して良問に挑戦し、力を高めていく

の1つです」と今野先生は強調する。

期間は、1・2年生が3日間、3年生は5日間。教科は国語、社会、数学、理科、英語の5教科で、毎日3〜4時間として、時間割を組む。内容は教科によって異なり、あらかじめプリントを配布し、家で取り組ませておいて授業で解説する教科もあれば、習熟度別に分けて課題に取り組む教科もある。

3年生の数学を例に見てみよう。数学では、成績上位層の「スペシャル」、中位層の「スタンダード」、下位層の「ベーシック」の3クラスに分かれる。どのクラスを受けるかは、生徒自身に選ばせる。1日目は「スペシャル」、2日目は「スタンダード」というように、毎

日クラスを変更することも出来る。自分の学力を客観視して自覚し、どうすればよいのかを自己決定させるためだ。

「スタンダード」「ベーシック」では、教師自作の「天下統一プリント」に取り組む。全国の高校入試から計算問題を集めたもので、いろいろな出題パターンに出来るだけ多く取り組ませて、入試問題に慣れさせることをねらいとする。ユニークなのは問題の進め方。茨城県の入試問題が解けたら、白地図の茨城県の部分を塗りつぶす。正解する度に白地図に色を塗り、全ての都道府県を塗り終わったら、晴れて「天下統一」が成る。1問ずつ着実に取り組ませると共に、全て塗りつぶせば「出来た」という達成感も味わえる。「ベーシック」のクラスには、10人程の受講生に対し、教師が2人付き、手厚い指導で課題をやり遂げさせる。

一方、「スペシャル」では、よりレベルの高いプリントに取り組み、一斉授業の形式で解説する。難易度の高い問題に取り組みさせることで弱点を自覚させて、モチベーションを喚起していくのである。

● 成果と課題

学ぶことそのものを 楽しむ意識を育てたい

「1人勉強ノート」や「家庭学習強調週間」の導入により、家庭学習時間は順調に増加し

ている。特に、2年生後期の平均学習時間は、12年度7月で67・1分だったが、同12月調査では119・5分と大幅に増え、2時間以上学習する生徒の割合は県平均とほぼ同じになった。

普段の学習の様子にも変化が表れている。2年生以上では、自分から「プリントをください」と苦手教科の教師に申し出る生徒が増えた。自分で弱点を把握し、克服しようとする意識が芽生えているのである。

今後の課題は「いかに生徒に目的意識を持たせられるかにある」と今野先生は述べる。

「生徒が自ら学びに向かうかどうかは、最終的にその生徒の目的意識にかかっています。『あの高校に行きたい』『こういう仕事に就きたい』というビジョンが、学習しようという動機につながります。しかし、夢や目標を持っている生徒が県平均より少ないのが、本校の実情です。将来の夢を持ち、より高い目標に挑戦していける生徒を育てていくことが、結果的に生徒の学力向上にもつながると期待しています」

もう1つの課題は、学びそのものを楽しむ気持ちを育むことであるという。

「生徒の意欲を刺激するような、良質の問いを与えられるかがポイントになってくるはずです。今後も授業改善を積み重ね、生徒が意欲的に学び合う姿を追求していきたいと思っています」（佐藤校長）

「無監督テスト」を実施。

信頼関係を土台に主体性を育む

富山県 富山市立速星中学校

富山市立速星中学校は、50年以上前から、全国でも珍しい「無監督テスト」を実施している。「信じあう心」を土台にした生徒と教師の信頼関係が、あらゆる活動の基盤となっている。生徒を大人扱いし、努力を評価することで、前向きに学習に取り組む意識を醸成している。

●背景

「信じあう心」を土台に 始まった「無監督テスト」

富山市立速星中学校で定期考査にテスト監督がない「無監督テスト」が始まったのは、1960（昭和35）年のこと。「教師が生徒に信頼されるには、まず教師が生徒を信じなければならぬ」——そう考えた当時の室林弥一校長によって、その前年の職員会議で提案されたが、教職員から不安の声が上がり、その年は実施が見送られた。しかし、室林校長は諦めず、1年間購買部の無人販売を行い、

数回にわたって無監督テストを試行し、不正が行われなかったことを確認した上で、教職員の同意を得て正式に始めた。以来、50数年にわたって、「信じあう心」は同校の教育の根幹として受け継がれている。

2002年度には、傘の貸し出しやノーチャイムデーなどの取り組みが加わった。当初は、生徒と教師が信じ合うことで、居心地の良い学校をつくるのが目的だった。今はそれより一歩進み、人が見ていてもいなくても、自ら正しく判断して行動できる人を育てたいというねらいが、よりクローズアップされるようになったと、清水賢校長は語る。

School Data

◎1947（昭和22）年開校。「正大 明朗 誠実」を校訓に、「信じあう心」と「志をもち、よりよく生きる生徒が育つ学校」を目指す。50年以上にわたり無人販売、無監督テストを実施し「信じあう学校」づくりに努めている。



校長◎清水 賢先生

生徒数◎ 884人 学級数◎ 26学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒939-2721 富山県富山市婦中町板倉 345-1

TEL◎ 076-466-2125

URL◎ <http://swa.toyama-city-ed.jp/hayahoshi-j>

公開研究会◎ 未定

「誰も見ていないところで正しい行いをするには心を磨くことが必要であり、それが生徒の自主自律につながると考えています」生徒自身が主体的に考え行動できるように、なってほしいという教師の願いが、「信じあう心」に込められている。

●無監督テストの意味

学校生活を通して築かれていく 生徒と教師の信頼関係

他校から異動してきた教師にとっても無監督テストは驚きである。13年度に赴任した1学年担任の窪喜妙子先生は、同校で初めての

1人で学べる生徒を育てる



写真 試験中は、教科担任が各教室を巡回し、出題内容に間違いがないかどうかを確認するのみ。それ以外に教師が試験中の様子を見回すことはない

定期考査をこう振り返る。

「問題用紙を配って教室を出ても、なかなか立ち去ることが出来ませんでした。テストは監督しなければならぬという意識にとらわれていることに改めて気付かされました」

「信じあう心」の実践は、教師にも大きな意識の転換を迫るのである。もちろん、さまざまな生徒がいる以上、常にうまくいくわけではない。清水校長はこう話す。

「かつて担任として本校に勤めていた時には、生徒のカンニングが発覚し、テストをやり直したことがあります。現在もさまざまなお噂を聞いて不安を感じ、テスト監督を付けてほしいという保護者がいます。しかし、『信じあう心』は本校の伝統であり、その精神を伝えることが我々の使命だと思います」
ここ数年は大きな問題となった不正はない

が、あった場合は、全校集会で呼び掛けたり校内放送で伝えたりして、生徒に極力事実を公表する。特定の生徒を罰することはない。その中で、校長や学年主任、クラス担任が改めて無監督テストの意義や信頼関係の大切さを説き、二度と不正が起こらないように呼び掛ける。3学年担任の高田秀二先生はこう話す。

「3年生になり高校入試対策が始まると、一部のテストで監督が付きますが、生徒から『なぜ今頃になって、監督をするのですか』という声が上がります。『最後まで自分たちに任せてほしい』という生徒の真摯な気持ちを感じます」

テスト中の様子は、テスト後、生徒にアンケートを取って確認する。「問題に間違いがあると困るので、巡回を早くしてほしい」といった内容がある程度で、このアンケートもなくてよいという生徒の声も多い。

「伝統を守りたい」 その思いが自分を律する

生徒はこの制度をどう受け止めているのか。1年生の岡田奈々さんは次のように話す。「入学して最初のテストの時は、誰かがカンニングをするのではないかと思って心配でした。でも、テストが始まると、教室は静かで緊張感があつて、思った以上に問題に集中できました。今は、宿泊学習などのさまざまな行事を経験してクラスの絆を深めてきたの



富山市立遠星中学校校長
清水賢 しずか・まさる
「心を磨いて自主自律が出来る生徒を育てたい」



富山市立遠星中学校
福村寿太郎 ふくむら・じゅたろう
教務主任。理科担当。「生徒の学力層に応じたきめ細かい指導を目指していきたい」



富山市立遠星中学校
高田秀二 たかた・しゅうじ
3学年担任。国語科担当。「生徒たちに必要な学習内容を精選し、分かりやすく提示したい」



富山市立遠星中学校
窪喜妙子 くぼき・たえこ
1学年担任。国語科担当。「生徒の努力をきちんと評価して、意欲を継続できるように心掛けている」

で、テスト中に不正をする人はいないと思えるようになりました」

3年生の池田瑛里奈さんが感じているのは「伝統の重み」だ。

「学校の歴史を知る集会で、先生方の反対意見もある中で無監督テストが始まったこと、『信じあう心』に込められた先生方の思いを知り、自分たちも先輩たちが受け継いできた伝統を守らなければならないと思いました。3年生になると、先生がいなくて当たり前になるので、誰かがカンニングするような雰囲気は全くありません。周りが静かなので、

自分もしっかりしなければならぬという気持ちで芽生えてくるのだと思います」

学校の伝統を守りたいという思いが、生徒に良い意味での緊張感をもたらし、自身を律しなければならぬと感じさせるようだ。

「入学当初から信頼関係があるわけではありませぬ。無監督テストや日々の授業、行事などを通して、学校の歴史を学び、クラスメイトとの団結を強めていく中で、信じ合う心が芽生え、自分たちを律していこうという気持ちが出てくるのだと思います」(高田先生)

●家庭学習指導の工夫

目標への道筋を示し 達成に向けた意欲を喚起

「信じあう心」を教育の基盤に据える同校だが、「生徒を信じて任せることと放任は違う」と教務主任の福村寿太郎先生は強調する。

「生徒の学力はさまざまです。自分で課題を見付けて取り組む生徒がいる一方で、学習の仕方を分かっていない生徒もいます。将来の夢を実現するために何が必要か、希望する高校へ進むためには何をしなければならぬかということ、教師がしっかり道筋を示してあげなければなりません。きちんと学習の見通しを持たせることで、生徒と教師の信頼関係は更に強くなっていくのです」

自律的な学習を促す場合も、まずは家庭学習の方法や時間の目安などを教える。

同校は13年度のアクションプランの1つに、家庭学習時間の増加を掲げている。

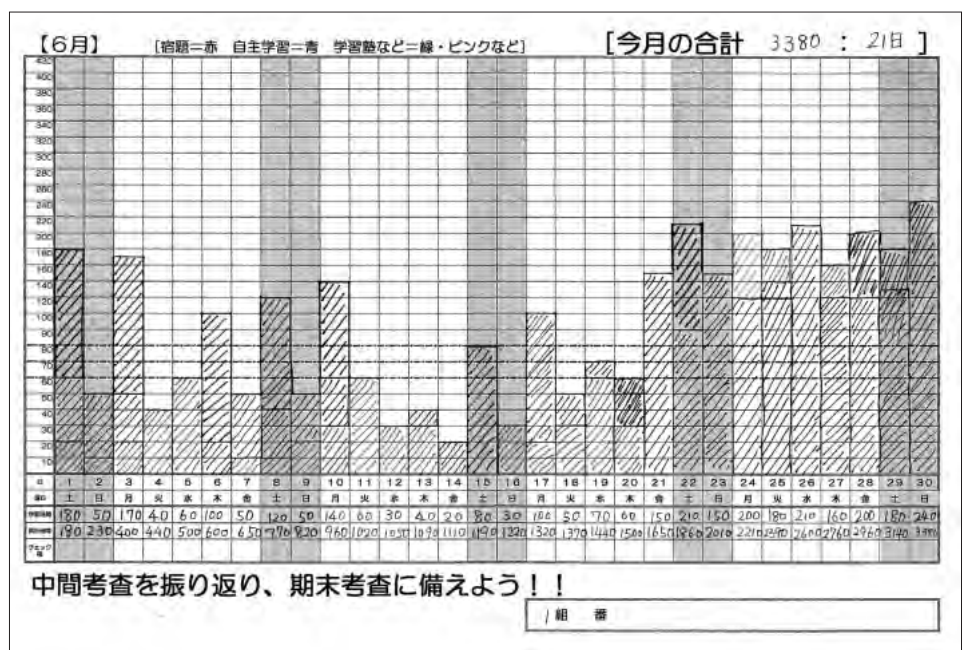
家庭学習時間の目安を「50分+学年×10分」(1年生60分、2年生70分、3年生80分)としているが、前年度、それを実行できた生徒の割合は50・6%と全体の半数にとどまっていた。また、「学校で学習に意欲的に取り組んでいる」生徒は多いものの、家庭学習に対する意識は高くはなかった。そこで、毎日「学習記録」(図)に前日に学習した内容と時間を記入し、クラスごとに集計し、毎月、達成状況を確認し、学校内外に公表している。

「『他クラスも頑張っている』『友だちは自分よりも学習時間が多い』などと気づき、自分も頑張らなければならぬと刺激を受けられれば良いと考えています」(福村先生)

学習計画で生徒の変化を見て 個別に声を掛ける

生徒同士が切磋琢磨する気持ちを育もうと、家庭学習の方法を共有する取り組みも行

図 「学習記録」の記入例(1年生)



中間考査を振り返り、期末考査に備えよう！！

組番

宿題は赤、自主学习は青、学習塾は緑などと学習時間を内容によって色分けして塗る。自分がどんな勉強に、どれだけ取り組んだのか、また取り組まなかったのかがひと目で分かり、振り返られる *同校の資料をそのまま掲載

う。例えば、全校集会では、各学年の代表者が、自分がどのように家で学習しているかを発表し、生徒全員に感想を書かせている。「家での学習方法が分からない生徒の参考となるように始めました。発表した生徒の方法がベストというわけではなく、自分の性格や学習スタイルに合ったものを取り入れて、

1人で学べる生徒を育てる

それがうまくいけば続けてみようという気持ちになつてくれればと思つています」(福村先生)

生徒個々の計画力に応じた指導も行う。

「学習内容まできちんと書ける生徒もいれば、計画を立てられない生徒もいます。学習時間と就寝時間は必ず書かせるように指導し、一人ひとりの生活リズムを見ながらアドバイスしています」(窪喜先生)

生徒の生活態度や意識の変化など、生徒の様子をモニタリングする際にも学習計画は有効だと高田先生は話す。

「家庭学習は継続が大事ですので、学習内容よりも学習時間が極端に減った生徒に注意を払います。定期考査後に極端に学習時間が減った生徒には『今が頑張る時だよ』と励ましたり、部活動で疲れている生徒には『大丈夫か』と声を掛けたりします。見守られているという安心感が、意欲を高めるきっかけになることを期待しています」

自分の取り組みが認められ、自己肯定感が学ぶ意欲になる

特に、成績下位層が家庭学習を続けるためには、「やって良かった」という満足感や「自分にも出来た」という達成感を味わわせ、学習意欲につなげることも大切だと捉える。

「多くの生徒が積極的に課題に取り組んでいる教科は、教師の受け止め方が上手なのだ

と思います。例えば、3年生の英語の先生は、授業の最初に生徒の家庭学習の内容を一人ひとり記録し、意欲・関心の評価に反映させています。生徒は自分の取り組みが認められたと感じ、その積み重ねで教師との信頼関係が深まっていくのだと思います」(高田先生)

国語や英語では、予習に課した語句の意味を授業中に質問し、きちんと予習に取り組んできた生徒が手を挙げられるようにしている。やってきたことが確実に評価される、きちんと取り組みが何か成果につながっていくことが明確な教科ほど、生徒は主体的に学習に向かつていくという。

また、教科によっては、定期考査前の放課後に個別指導を行う質問教室を開いている。「学力に不安のある生徒に声を掛け、放課後に集めて、質問に答える形で指導をしています。先生が見守っている、少人数で学習を見てもらえると分かれば、生徒は安心して学習に向かえます。そうして、自分にも出来たという達成感を味わい、次の意欲に結び付くことを期待しています」(窪喜先生)

●成果と課題

中間層の意欲を高めることが課題

1年生から積み上げてきた「信じあう心」の精神が、皆で高め合おうとする意識をつくり上げている。例えば、グループ学習の際、

メモを読み上げる、発表の際には板書をするなど、全員に役割を分担してもらい、参加を促すようにする。各グループのリーダーと教師が連携しながら、頑張っている姿を皆に見せられるように配慮している。

「3年生になると、生徒たちは学習が苦手な生徒の発言も取り入れながらグループ学習を進めるようになります。授業に皆が参加しているのは、そうした生徒の温かい思いやりに支えられているからだと思います」(高田先生)

今後の課題は、成績中位層の意欲の引き上げにあると、高田先生は話す。

「集団に埋もれてしまいがちな中間層の生徒ほど、何か変わるきっかけを求めていると思います。彼らが一皮むけて大きく成長するためには、教師が全てお膳立てをするのではなく、自分で食らいついて壁を乗り越える経験が必要でしょう。そうした意欲を高めるための指導の工夫が必要だと感じています」

清水校長は学校の組織力の向上を指摘する。「部活動を終えて帰宅すれば、家庭学習から逃れたいという気持ちになりますから、スマートフォンステップで達成感を味わえるような工夫を、家庭学習にもする必要があると思います。しかし、その土台にある『信じあう心』を育てる教育を、学校全体が組織的・計画的に取り組むことが、1人で学べる生徒を育てるために必要だと考えます」(清水校長)

毎週の小テスト、毎日の学習計画 立案で、家での学習を意識化

香川県 多度津町立多度津中学校

多度津町立多度津中学校では、生徒の学習意欲の二極化を課題と捉え、「家庭学習の習慣化」を目標とした改革に取り組む。「自学タイム」「自主学习ノート強調週間」など、家庭学習の効用を感じさせる取り組みにより、あらゆる学力層で自主学習の習慣が定着しつつある。

●背景 最大の課題は 学習意欲の二極化

多度津町立多度津中学校は、町唯一の公立中学校だ。同校が2012年度に「家庭学習の習慣化の確立」を目標とした取り組みに着手した背景には、学力の二極化と学習意欲の低さに対する危機感があった。

11年度の県の学習状況調査の結果で、「家で学校の宿題をしていますか」という質問に、「している」と答えた生徒が県平均を上回る一方、「全然していない」と答えた生徒の割

合も県平均より高かった。12年度の文部科学省「全国学力・学習状況調査」では、無解答率が全国平均を上回っていた。

加えて、数年前から生徒指導上の課題が山積していた。新名勝校長は次のように語る。

「基本的な生活習慣が確立していない生徒がおり、授業中に立ち歩くなどの問題行動も見られました。地域や保護者からは必ずしも信頼を得られておらず、校区内の小学校からの入学者が減少するという状況がありました。従来から力を入れてきた生徒指導に加えて、学習指導面からの働き掛けも強めることで、落ち着いた校風に変えていくことが喫緊

School Data

◎1956(昭和31)年、統合多度津中学校発足。「常に純正を愛し仲間とともに自己の最善を尽くす」が校訓。地域・保護者に信頼される学校を目指し、家庭学習の習慣化、清掃活動やあいさつ運動などに力を入れている。



校長◎新名 勝先生

生徒数◎ 539人 学級数◎ 15学級

所在地◎〒764-0014 香川県仲多度郡多度津町本通 2-11-5

TEL◎ 0877-33-2271

URL◎ <http://www.tadotsuchu.tadotsu.jp/>

公開研究会◎ 未定

の課題でした」

取り組みのポイントは、①家庭学習の方法を教える、②家庭学習の必要感・有用感を高める、③家庭学習に取り組む環境をつくる、の3つだ。

「学力の二極化の根本には、学習への意識の二極化があると考えています。最終的には学力の向上が目的ですが、すぐに成果が上がるものではありません。むしろ、家庭学習習慣の定着を切り口として、コツコツと学習に取り組める生徒を育てることこそが重要であり、生徒指導上の課題解決にも結び付くと考えました」(新名校長)

1人で学べる生徒を育てる

●家庭学習習慣の定着の工夫 帰宅後に学習する内容を 学校で考えさせる

学習習慣が身に付いていない生徒にまず必要なのは、家でのような学習をすればよいのか見通しを持たせることではないか。そう考えた同校は、放課後に10分間の「自学タイム」を設けた。帰宅後に何を学習するのか、学校であらかじめ計画を立てるのだ。

計画では、B5判の用紙に11日分の枠を設けた「今日の学習計画」を使用する(P.16図)。枠を縦2列に分け、右の枠には宿題など「クラス共通の学習」を、左の枠には予習・復習や自主学習ノートなど「自分で内容を決める学習」を書き込む。書いた内容は終わったら線を引き、消していくことで達成感を味わえるようにした。現職教育主任の山田真也先生は次のように説明する。

「PLAN、DO、SEEの流れを、生徒に体感させることで、行き当たりばったりではなく、効果的な学習を自分で行えるようにすることがねらいです。日課に固定させたことで、学校全体で取り組む雰囲気をつくることも出来ました」

計画を立てやすくするため、クラスごとにさまざまな工夫を凝らす。計画を自力では立てられない生徒のために、班ごとに見せ合ったり、計画表の拡大版を教室に貼り、教科係

が宿題を書き込んだり。3学年担任の矢野真衣先生はこう話す。

「宿題を一覧表にすれば、どのような宿題が出たのか忘れがちな生徒はもちろん、担任の私自身も、どの教科で宿題が出ているのがひと目で分かります。帰りの会で『明日は〇〇の提出日だね』と声を掛けたり、取り組んでこなかった生徒に個別に指導したりしています。生徒に『やらなければならない』という意識を持たせる効果があります」

●家庭学習とテストの連動

金曜の小テストの内容を 事前に伝え、家庭学習を促す

こうして取り組んでいる家庭学習の成果を生徒が実感できるように、家庭学習に連動させて小テストを実施している。

小テストは週1回。事前に出题範囲のプリントを配布して自主学習を促し、木曜日に「プレテスト」を行い、翌金曜日に20問中4問だけ変えた「本テスト」を実施する。プレテストを完璧に学習しておけば、合格点の16点が取れるため、家庭学習がテストに役立つという効用感、やれば出来るという達成感を味わうことが出来る。テスト後は満点者、合格率の結果をクラス別に掲示し、学年全体で競い合う雰囲気をつくる。満点の生徒は名前を貼り出すため、それを目標に頑張る生徒も多い。小テストを自主学習ノートと関連付けるこ



多度津町立多度津中学校校長
新名 勝 しんみやう・まさる
「小さなことでもコツコツと取り組める生徒を育てたい」



多度津町立多度津中学校
2学年担任。家庭科主任。「生徒と同じ目線に立って、『諦めない指導』を地道に追求していきたい」



多度津町立多度津中学校
現職教育主任。数学科主任。「学習に限らず、生徒一人ひとりを大切にして、日々の学校生活を楽しんでいきたい」



多度津町立多度津中学校
3学年担任。保健・体育科担当。「生徒一人ひとりをしっかり把握して、自立した生徒を育てていきたい」



多度津町立多度津中学校
1学年担任。数学科担当。「当たり前のことを当たり前に出来る生徒を育てたい」

とで、ノートの提出率も上がっている。同校では毎日1ページの自主学習ノートを使った学習を課しているが、学習計画が立てられない生徒には、「計画よりも、簡単なことからでもよいので、ノートに小テスト用の学習をしてきなさい」と言い、自主学習ノートの提出を優先させる。また、小テストの不合格者には放課後に再テストを行うが、受けられな

生徒には、再テスト用紙を渡し、翌日まで
に解き、自主学習ノートに貼って提出するよ
うに指導することもある。さまざまな手段や
方法で、生徒に毎日、家庭学習に取り組みせ
るといふ姿勢を貫いている。

週末課題も平常点に加え 取り組んだ成果を評価に反映

小テストと同じように、定期考査は週末課
題と連動させている。

同校では毎週、5教科全てで週末課題を出
す。普段は、生徒は課題の一覧表を見ながら、
土日に週末課題と自主学習ノートに取り組
み、月曜日の朝に提出。教科担任がチェック
して、その日のうちに生徒に返却する。

この週末課題で、定期考査前にはテストに
直結する対策プリントを課す場合がある。試
験前にどのような勉強をすればよいのか分か
らない生徒は、特に熱心に取り組むという。
「家庭学習の内容をテストに結び付けるこ
とで、自分で学習することの有用感を持たせ
ることがねらいです。課題の量は教師間で調
整して出し、提出されたノートは一つひとつ
必ずチェックし、評価・評定に反映させてい
ます」(山田先生)

担任によっては、生徒の様子を把握するた
めに、担当教科以外の取り組みも確認する。
1学年担任の川本生積先生はこう話す。

「担当教科の数学以外の状況も知っておき

図 「『今日の学習計画』の使い方」の生徒用プリント

(資料1) 「今日の学習計画」の使い方 学習図書委員会

1 「自学タイム」の時間に、今日の家庭学習で何をやるのかを考えて、書き込む。

(例) 今日の自学ノートは、漢字をしよう。英トレノートは、このページの単語がいいな。社会の分析も、自主的に復習しようかな。それから、今出ている宿題は、数演と国語のワーク、それから、学級旗の図案だったぞ。

日 付	自学ノート・英トレ・自主学習	宿題・今出ている課題
4月 26日	自ノート 漢字練習 英トレ 教科書8～12ページの単語 (本) 社 分析2～8p見直し	数演6～8ページ 国ワーク 9～11ページ 丸つけも 学級旗図案

2 家に帰ったら、計画したことをどんどんしていく。終わったら、赤ペンで済す。

日 付	自学ノート・英トレ・自主学習	宿題・今出ている課題
4月 26日	自ノート 漢字練習 英トレ 教科書8～12ページの単語 (本) 社 分析2～8p見直し	数演6～8ページ 国ワーク 9～11ページ 丸つけも 学級旗図案

3 夜の日の朝、自学ノートにはさんで先生に提出。自学タイムの時間に、ノートと一緒に返して
もらったら、前日できなかった分も含めて、その日の計画をたて、書き込む。

(例) 昨日は、分析と学級旗ができないまま寝ちゃったから、今日は自学ノ
ートで分析の見直しをしよう。英トレは、中英。それから今日、理科で次
の授業までの宿題が出たけど、早めにやっとならうかな。

日 付	自学ノート・英トレ・自主学習	宿題・今出ている課題
4月 26日	自ノート 漢字練習 英トレ 教科書8～12ページの単語 (本) 社 分析2～8p見直し	数演6～8ページ 国ワーク 9～11ページ 丸つけも 学級旗図案
4月 27日	自ノート 社 分析2～8p見直し 英トレ 中英 4ページの単語 (金)	学級旗図案 中理 5ページ

※ どんなふうに使ったかわかったでしょうか。毎日の自学タイムで、こんなふうな家庭学習の計画をた
てるようにすれば、行き当たりばったりでない、効果的な家庭学習ができます。学力も伸びていきます。
これから、「自学タイム」と「今日の学習計画」をしっかりと活用して、家庭学習を充実させましょう。

たいので、月曜の朝に週末課題が提出された
ら、全てのノートを点検し、きちんと丸付け
をしているか、間違ったところをやり直して
いるかをチェックしています。提出しなかつ
た生徒には、出来るだけ早く提出するように
声を掛け、やり遂げさせるようにしています」

●家庭学習を行う雰囲気づくり 「自主学習ノート強調週間」で クラスで家庭学習に向かう

学校全体で、家庭学習に向かうような雰
気づくりも行う。その1つは、「自主学習ノ
ート強調週間」だ。年5回、定期考査の1週間

前に、クラス間で自主学習ノートに取り組
んだページ数を競い合う。学習内容がある程度
明確になる定期考査前に、学校全体で家庭学
習に向かう雰囲気を盛り上げることで、普段
は学習に取り組みない生徒でも学習に向かう
きっかけにするのがねらいだ。

普段は1日最低1ページ取り組むことにな
っているが、強調週間ではクラスメイト全
員の取り組んだページ数を合計して、最優秀
クラスを表彰する。また、13年度からはクラ
スごとの提出率も集計し、100%だったクラ
スは昼休みの給食の時間に校内放送で発表
している。

「今日の学習計画」の立て方を、生徒が考えやすいようにプリントで説明する。
2013年度からは、「わたしの生活」という冊子の「学習計画欄」を使って、今
日の学習計画を記入させている

* 同校の資料をそのまま掲載

1人で学べる生徒を育てる

表彰されようと、工夫を凝らすクラスもある。矢野先生のクラスでは、6つある班それぞれに、1日20ページを1週間続けるという目標を割り当て、目標達成のために、一人ひとりの割り当てのページ数を相談する。

「回数を重ねる」ことに、『今日は用事があるから誰かお願い』『昨日は少なかったから、今日は僕が頑張るよ』というように、話し合いの中で交渉する術を学んだり、団結心を高めたりする様子が見られるようになりました。今は目標のページ数を示すと、生徒同士がすぐに話し合って、分担を決めています」（矢野先生）

班で決めた約束なので守らざるを得ず、結果的に目標のページ数の家庭学習を確実にこなす動機付けにもなるという。本来、個人的な取り組みである家庭学習をグループ活動に利用することで、生徒同士の団結や信頼関係、高め合う意識を巧みに引き出している。

● 成果と課題 成績上位層にも家庭学習に向かわせる工夫を

今後の課題は学習計画に対する意識の改善だ。「自学タイム」を始めて1年半が経過したが、依然として2・3年生の中にも学習計画を立てられない生徒が一定数おり、多いクラスでは10人以上に上るといふ。2学年担任の細川仁美先生は、次のように語る。

「成績中位層以下の生徒の中には、教師が具体的に方法を教えても、学習計画を立てられない生徒がいます。ただし、それは学力や能力の問題ではなく、やる気のなさが根本的な原因だと思われまます。学習計画の必要性を意識させて、自分からやろうと思う気持ちを育てる工夫が必要です」

成績上位層への意識の持たせ方も課題だ。自主学習ノートで伸びるのは、力があるけれど伸び悩んでいる成績中位層の生徒に多い。逆に、成績上位層の生徒が必ずしも質の高い自主学習ノートを仕上げてくるとは限らない。塾の課題があるためか、学校の課題がそろそそになる生徒もいるという。

「班で自主学習ノートのページ数を分担する際も、『塾があるから』という理由で、協力しようとしないう生徒もいます。そういう生徒は周囲の信頼を得られず、班の団結力も弱まります。同じ班の生徒がそうした生徒に『一緒に頑張ろう』と声を掛けたり、教師が自主学習ノートの大切さを伝えたりしています。が、上位層をどのように学校の取り組みに乗せていくのかは今後の課題です」（矢野先生）

コツコツ取り組む姿勢が 徐々に身に付いていると実感

このような課題はあるものの、家庭学習に前向きに取り組む生徒は確実に増えている。12年度、生徒に行ったアンケートによると、

「自主学習ノートは自分の学習に役立っていると感じるか」という質問に対して、80%の生徒が肯定的な回答をした。特に、12年度1年生（現2年生）は87%という高い数字だった。また、「中学生に家庭学習は必要か」という質問に「全然（必要ない）」と回答した生徒は、6月時点の4%から11月には2%に減少した一方、「はい」と答えた生徒は50%から52%に増え、最も課題だった学習意欲がわずかながら向上している様子が見えがえた。

家庭学習が習慣化しつつあることは教師も肌で感じている。「自主学習ノートや週末課題を、ほとんどの生徒が提出できるようになったのは大きな成果です。コツコツと取り組む姿勢が身に付きつつあるのを感じます」と山田先生は語る。学習面の変化に伴い、生徒の問題行動も激減し、特に3年生は1年生の頃に比べて授業中の雰囲気が見違えるように落ち着いてきたという。

そして、何よりの大きな成果は教師の意識改革であると、新名校長は語る。

「本校は学校経営の重点目標に同僚性・協働性を掲げています。先生方に真摯に改革に取り組んでいただき、教師集団の団結が強くなったことが最大の成果です。この団結を土台として、後は家庭学習と授業をつなぐ工夫も含めた授業改善にも力を入れていきたいと考えています」

地域や保護者と共に、自ら率先して学ぶ生徒を育てる

東京都 鷹南学園 (三鷹市立第五中学校、中原小学校、東台小学校)

コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育校である鷹南学園では、教師だけではなく、立場や年齢の異なるさまざまな地域の人々が多面的に生徒にかかわることにより、生徒の良い面や可能性を引き出し、主体的な学びにつなげようとしている。

背景

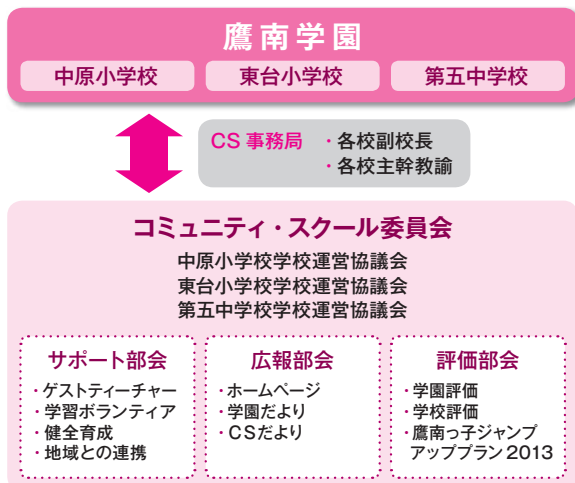
保護者や地域と共に小・中一貫校を運営

東京都三鷹市は2006年度から、地域住民や保護者が学校運営に参加するコミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育を進めてきた。市内7つの中学校の各学区を1つの「学園」とし、小・中一貫のカリキュラムで教育活動を行う。

第五中学校、中原小学校、東台小学校の3校で成る鷹南学園は09年に開園。9年間を第一期(小学1～4年生)「基礎・基本を練り

返して習熟を図る時期」、第二期(小学5年生～中学1年生)「基礎・基本を生かし、思考力・判断力・表現力をつける時期」、第三期(中学2～3年生)「基礎・基本を応用して、個性・能力を伸ばす時期」に分け、自ら学び、考え、問題解決できる子どもの育成を目指す。鷹南学園で教育活動推進の一翼を担うのが「コミュニティ・スクール委員会」(以下、CS委員会)だ(図1)。学識経験者、青少年対策委員会、交通安全対策委員会、地域子どもクラブ、PTA、おやじの会、住民協議会、地域協力者など学校や地域で活動を行う諸団体のメンバーと各校の校長を合わせ、計21人

図1 鷹南学園の組織体制



*学校の資料を基に編集部で作成

School Data

◎2009(平成21)年、中原小学校、東台小学校、第五中学校の3校から成るコミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育校として開園。保護者や地域住民と共に魅力ある学校づくりを目指している。



学園長◎白井千晴先生 中学校校長◎伊藤陽一郎先生

中学校生徒数◎373人 中学校学級数◎12学級

中学校所在地◎〒181-0004 東京都三鷹市新川1-7-20

中学校TEL◎0422-45-3201

学園URL◎<http://www.education.ne.jp/mitaka/takaminami/>

公開研究会◎2014年10月31日(金)

1人で学べる生徒を育てる

で構成されている。

CS委員会の役割は、各校の「学校運営協議会」のメンバーとして、学校の経営方針や教育計画、予算に関する協議・承認・評価、対外的な情報発信、地域や保護者の声の収集などだ。更に、ゲストティーチャーや学習ボランティアなど地域人材のコーディネート、3校合同の演奏会の主催、子どもが学園のことを考える「子ども熟議」の開催など、学園のパートナーとして幅広く活動する。

●保護者との連携の工夫

家ではどう子どもを支援しているか 全家庭にアンケートを実施

そのCS委員会が13年度に「鷹南っ子ジャンプアッププラン2013」（以下、鷹南プラン）を始めた。これは、「学園の教育方針」「育てたい子どもの姿」「身に付けてほしい力」を示し、それに対して「学校がやること」「家庭でやっていること」「地域でやること」を明確にした上で、学園が目指すべき教育を学校・地域・保護者で共有し、実践しようという試みだ（P.20図2）。

実施に際し、「育てたい子どもの姿」に沿って家庭でどのような取り組みをしているかを保護者が記入するアンケートを、全世帯を対象に実施した。鷹南プランを始めた背景について、小田切茂美CS委員会会長はこう話す。「本学園には3校共通の教育方針や育てた

い子どもの姿があり、その実現に向けてさまざまな取り組みを行ってきました。その内容は定期的に情報発信していますが、それだけではコミュニケーション・スクールの概念や学園全体の取り組みが、十分に保護者に浸透しているとはいえません。そこで、このアンケートを通じて、鷹南学園の教育方針を学校の取り組みと併せて分かりやすく提示し、保護者の意識を学園に向けたという思いがありました」

更に、各家庭の取り組みをまとめて紹介し、それぞれの家庭での取り組みに価値があることを報告書にして伝えることで、子育てに自信を持つきっかけにしてほしいというねらいもある。学園から一方的に情報発信するだけでなく、保護者を支援し、相互に協力することが結果的に学園の目指す児童・生徒像の育成につながると考えたのだ。

学校目標に対応した 家庭での支援の仕方を伝える

アンケート回収率は、小学校で7割、中学校では5割と、CS委員会の予想を上回る反応があった。

アンケートの結果から見えてきたのは、家庭でさまざまな試行錯誤をする保護者の姿だ。「地域の人に気持ちよくあいさつをする」「迷惑を掛けないようにマナーを守る」などの項目は、保護者は自信を持って取り組み一方で、子どもに合った学習法を考えたり、計



鷹南学園園長
三鷹市立中原小学校校長
白井千晴 ちしひ・ちほろ



鷹南学園三鷹市立第五中学校校長
伊藤陽一郎 いとう・やういちろう
「自ら行動を起こし、出来ないことに
対して一生懸命努力できる生徒を育て
たい」



鷹南学園三鷹市立第五中学校
小川敦子 おがわ・あつこ
1学年担任。数学科担当。小・中一貫
コーディネーター。「皆が『分かった』
と思える授業を実践していきたい」



鷹南学園三鷹市立第五中学校
池田篤史 いけだ・あつし
1学年担任。英語科担当。研究主任。
「生徒の知的好奇心を喚起するような
授業を心掛けたい」



鷹南学園コミュニティ・スクール委
員会会長
小田切茂美 おだぎり・しげみ
「子どもにとって『辛口の友人』とし
て、長く学園にかかわっていきたい」

画的に学習をすることをどうサポートすれば良いかについては、取り組みの難しさを感じている保護者が多かった。

白井千晴学園長は「自由記述式でしたが、多くの方が丁寧に答えてくれました。保護者が何を考え、家庭でどのように子どもとかかわっているか、その姿を捉えるのは学校だけでは難しい面があります。CS委員会からの

図2

「鷹南っ子ジャンプアッププラン 2013」(抜粋)

鷹南の方針	育てたい学園の子どもの姿	身に付けてほしい力	学校がやること	家庭でやっていること・やりたいこと ●多い回答、※特記	地域でやっていること● 取り組める可能性の案◆
確かな学力 勉強する 習慣を 身に付け、 自ら率先して 学ぶ力を 育てる	自ら学び、 考え、 発表できる子	自分からやる勉強 (計画的な学習)	問題解決型授業 に取り組み、 継続して学び 方や考え方、 表現力の育成 を図る	<ul style="list-style-type: none"> ●自分で取り組ませるようにする ●自分で計画を立て工夫して学習時間を確保している ●予習、復習をするよう働きかける ●「勉強しなさい」と言わない。やる気をなくしてしまうので ●通信媒体(インターネット、通信教育、ラジオ講座等)を使用して学習する ●復習をするよう働きかける ●塾に通わせる ●学校の話をさせる ●声をかける ●親子の会話を通して自ら考える力をつける ※リビングで勉強させる ※親が勉強の様子を見て、教えたり声をかけたりする	<ul style="list-style-type: none"> ○コミュニティセンターのロビースペースを自習のために開放している(生徒同士で教えあいをしている) ○地域ボランティアによる放課後自習室の開設 ○丸池わくわくまつり、コミセンまつり、コミセン運動会、合同コンサートなど地域主催行事での発表の場の提供 ○中学生による小学生のための読み聞かせ活動(子どもクラブと中学校SSSの合同で) ◆地域協力者による学習指導ボランティアの配置 ◆先輩の声を届ける(チャレンジキャンプでの小一中交流会など) ◆社会人の声を届ける(アントレの第三者評価、職業人の話を聞く会への協力など) ◆地域の大人の知恵と力を提供する(人材バンク) ◆地域の大人が「楽しく」「がんばっている」姿を見せる ◆地域対象に漢検、数検、英検の実施
		自分に合った 学習方法			
自分の考えを持ち、 自分の意見で 話したり、 人の考えを 聞いたりする					
勉強する 習慣が 身に付いた子		家庭学習の習慣	朝学習、朝読書、放課後学習の定着化を図る(鷹南スタンダードの確立)	<ul style="list-style-type: none"> ●毎日学習する時間を決めている ●宿題やワークを毎日必ずする ●朝学習をしてから登校する ●計画を立てる ●テレビやゲームの時間を決めたり、約束を決めたりしている ●予習・復習の習慣化を図る ●図書館の活用を勧める ※親が自ら学習する姿勢を見せる ※親子で同じ本を読み、お互いの感想をいっしょに ※夜、家族全員で10~15分読書をする時間を持つ	
		読書に親しむ習慣			

鷹南学園の3つの方針それぞれについて「育てたい学園の子どもの姿」などをまとめた。「地域でやっていること・やりたいこと」は今後検討する *学園資料から抜粋して編集部で作成

アンケートだからこそ、保護者は率直な意見を書いてくれたのではないかと思えます」と語る。小田切会長は、「小学校、中学校と学年が上がると共に、空欄が増えていく項目がありました。また、中学校では、回答欄にぎっしり書き込む保護者と、全く書いていない保護者の二極化が顕著でした」と分析する。「ここから見えてくるのは、中学生に対する保護者のかかわり方の難しさです。小学校では毎日宿題が出され、内容もドリル的なものが多いため、保護者は支援しやすいのですが、中学校では、宿題以外に自分で予習・復習する姿勢が求められるようになっていきます。『復習しなさい』と声を掛けるものの、具体的にどのように支援すれば良いのかが分からないという状況が見て取れました」(小田切会長)

CS委員会は、空欄は保護者からの「かかわり方を教えてほしい」というサインと捉え、保護者に配布するアンケート結果をまとめた報告書に、家庭でよく行われていた取り組みと、C

S委員会です。特に印象に残った取り組みを抜粋して掲載した。報告書に載せきれなかった取り組みも、ホームページ上で紹介する予定だ。各校にもアンケート結果を伝え、家庭の実態に応じた宿題の出し方や、家庭学習方法をアドバイスするなど、自学自習を促す指導に役立ててもらいたいと考えている。

一方で、CS委員会としても、生徒の主体的な学びを支えるための取り組みに着手したいと小田切会長は語る。

「CS委員会を支えてくださる多くのサポータースタッフには、さまざまな社会経験を持つ人材が集まっています。その強みを生かし、自ら学び、考える力の基盤となる『人間力』を育むための取り組みが出来ないかと考えています」(小田切会長)

例えば、多くの保護者がかかわりが難しいと感じていた「新たな挑戦や失敗を恐れず一歩を踏み出す」力を育てるため、CS委員会主催の課外活動として異文化交流プログラムなどの試みが検討されている。学習面は学校が、その基盤となる人間力の育成はCS委員会が担うことで、子どもの主体的な学びを支えていこうとしている。

●中学校での指導の工夫

「放課後自習室」で

地域の人が自習を支援

第五中学校では、鷹南プランに示された方

1人で学べる生徒を育てる

針に沿いながら、生徒を学びに向かわせるための独自の取り組みを行っている。

同校では、「自ら学習が出来るようになるには、授業内容をしっかり理解していることが前提」という考えの下、数学ではTT（チーム・ティーチング）、英語では習熟度別少数授業を行い、生徒一人ひとりの授業の理解度を高めることに重点を置く。英語科の池田篤史先生は「授業中も、つまづいている生徒には個別に対応しています。英語科では、毎日10行以上、教科書の英単語や英文を書く課題を出していますが、その取り組み状況も授業中に確認しながら進めています」と話す。

授業内容の理解を促す取り組みとして、生徒による定期考査の予想問題作成も行っている。これは、各クラスの教科係の生徒が、定期考査の出題範囲に従って予想問題を作成するというものだ。教科係は必ずしもその教科が得意な生徒が務めるわけではないが、予想問題はクラスの生徒全員に配布するので、手を抜かず作成するという。

数学科の小川敦子先生は、「良い予想問題を作ると他の生徒から褒められるので、そのうれしさが主体的な学習につながっています。予想問題の作成には、教科書やノートを読み込み、しっかり学習する必要があるのです。担当した教科についてはテストの得点が高くなる傾向が見られます。家庭学習の方法も身に付き、良い結果を出せることが、次の学習

への動機にもなっているのではないでしょうか」と語る。もちろん、予想問題を解くことが、本番のテスト結果にもつながることを、生徒たちは実感しているようだ。

これらの取り組みに加え、10年度からは、保護者の発案により「放課後自習室」を設けている。部活動の定休日が多い水曜日に、自習室として教室を開放するもので、定期考査前は週3日実施する。自習を支援するのは、保護者や地域住民の有志から成るスクールサポータースタッフ（SSS）だ。主に学習支援、課外活動支援、学校支援（環境整備）を担っており、13年度の登録者は約140人。「放課後自習室」では、2〜3人が安全管理者として見守り役を担当する。出席する生徒数は時期によりまちまちだが、毎回出席する生徒もいる。自習室が生徒にとって安心できる居場所となっており、それが自学自習の習慣に結び付いているのだろう。

第五中学校の伊藤陽一郎校長は、学校にさまざまな地域の人々が入ることで、生徒の学ぶ意欲につながると感じている。

「教師でも保護者でもない、第三者的な立場の方と触れ合うことは、生徒の視野を広げる良い機会になっています。本校では、『放課後自習室』以外にも、SSSに授業の支援してもらったり、生徒が地域の行事に参加するなど、地域の方々や触れ合う機会があります。さまざまな経験や出会いをする中

で、自分の良い面や可能性に気付き、目標や夢が出来て、主体的に学ぶ姿勢にもつながっているのではないのでしょうか。教育は人が行うものです。その『人』に地域のさまざまな方が入っていることは、子どもの学ぶ意欲を支える大きな力になっていると感じます」

●今後の課題

学園の取り組みを「見える化」し、家庭での支援につなげる

今後は、鷹南プランでの保護者アンケートの結果も踏まえて、現状では未定になっている「地域でやること」も具体的に決めていく予定だ。CS委員会で検討されている異文化交流などの取り組みや、おやじの会や子どもクラブなどの地域の諸団体の取り組みも「地域でやること」に組み入れられる。この欄が埋まれば、学校、保護者、地域住民が参加する「鷹南学園」の教育の全体図が「見える化」され、教育活動の活性化が期待される。白井学園長は次のように語る。

「地域には家庭に課題を抱える子どもも多いため、家庭学習に学習の全てを委ねることは出来ません。だからこそ、取り組みを『見える化』し、『地域住民も支えていくから、保護者も一緒に頑張りましょう』とアピールしていくことが大切だと考えます。これからも、学校、保護者、地域の三輪で子どもの主体的な学びを支えていきたいと思えます」

私の中学校での学習、高校での学習

生徒は、どのような意識で家庭学習に取り組んでいるのだろうか。

高校生となった今、中学時代にどのような学習をしていたのかを振り返り、高校での学習への影響についても聞いた。

高校の勉強は苦手科目中心で、得意科目の勉強時間が取れない

公立高校2年 黒木水月みづきさん

◎調べ学習には自分から取り組む

中学時代に勉強で最も影響を受けたのは、1年生の社会科の授業です。まずノートの取り方がユニークで、B5判ノートの左ページに板書を写し、右ページに授業で自分が大事だと思ったことを書くという方法でした。こうすると復習がしやすかったので、他教科でも同じ方法を取るようになりました。また、授業では4人1組で机を合わせていたので、他の人がどこでメモを取っているのかが分かり、先生の話を聞きながらどこが重要なのかをつかめるようになったと思います。時々、ある時代や、あるものの歴史についての調べ

学習が宿題に出ましたが、自分なりに気付いたことをまとめるのは楽しく、またそうすることで理解が深まっていったので、宿題以外にも調べ学習をするようになりました。小学校では授業の中での調べ学習が結構ありましたが、中学校ではほとんどありませんでした。週1回でもあれば、興味の幅が広がったのではないかと思います。

所属していた吹奏楽部の練習後に帰宅すると19時頃で、勉強は宿題や復習で1〜1時間半するのが精いっぱいでした。そのため、苦手な数学や理科は、宿題や復習と最低限はしましたが、それで授業についていけたので、

必要以上に勉強する気にはなれませんでした。

苦手科目対策に本腰を入れたのは、3年生になり、高校入試を意識してから。吹奏楽部の引退は秋でしたが、運動部の多くは夏休み前に引退します。周りが受験モードになり、自分もやらなければと焦りました。内申点を上げようと家での学習時間を増やし、定期考査対策に力を入れました。ただ志望校がなかなか決まらずに困りました。高校見学に行っても決められず、目標がなのまま勉強だけしていました。11月末に志望校が決まりましたが、周りがのんびりしていたら私も引退までそれほど勉強していなかったと思います。

◎高校では順位がはつきり出るから頑張れる

高校の授業は、中学校よりも進度が速く、分からなくてもどんどん先に進みます。中学時代は1回復習すれば理解できたのに、今は教科書やノートを何度も読み返さないと理解できません。本当は好きな科目の学習をしたいのに、その余裕はありません。得意科

1人で学べる生徒を育てる

目は学習時間が短くてもいい成績が取れますが、苦手科目は時間を費やしているのに思うような点が取れず、くじけそうになります。でも、今、友だちに学年トップの人がいて、その子が短い時間でも単語帳を開いている姿を見ると、努力してこそ良い成績が取れるの

だ、自分も頑張らなければと刺激を受けます。また、自分には負けず嫌いなところがあるようです。高校では成績の学年順位がはっきり出るので、思ったような成績が取れないと、次はもうちょっと上を目指そうという気持ちも、学習に向かう意欲になっています。

は全国の高校生と同じ土俵に立つ。全国の難関校の高校生と同じ大学入試で勝てるのかと考えました。高校での勉強は大学進学に直結することであり、将来のために勉強するものだと思います。ならば、勝負のしやすい、好きな教科に力を入れることにしたのです。

授業の中でもっと教養を
教えてほしかった

私立高校3年 川原大洋さん



◎全教科合わせて平均点を取ればいい

自分でもあまり良くないと思うのですが、中学時代は定期考査前に一夜漬けで勉強することも多く、それで苦手科目でも70点くらいは取れていたのはいやと思っていました。もちろん宿題などは提出しますが、授業で分からないことがあっても質問するという意識はありませんでした。得意の国語や英語は授業をしっかり聞いていれば、家でさほど勉強しなくても良い成績が取れていたの、苦手な数学や理科が良くななくても、全教科をおしなべて平均点くらいを取れば十分と思っていたからです。野球部に所属し、部活動や部の友だちと遊ぶことが僕にとって最も大切であ

り、勉強が大事だと分かっているでも本気で取り組んではいませんでした。

◎将来に直結する高校での勉強

高校受験も、「この高校に行きたいから頑張る」というよりは、「今の成績ならここに行ける」という意識でした。そこそこ頑張れば入れそうな公立高校を第1志望校にしたのですが不合格で、併願の私立高校に進学することになりました。普通なら、ここでショックを受けるところですが、僕は自分の実力なら仕方ないと冷静でした。

ただ、大学入試は同じような失敗は出来ないと思いました。僕は中学時代から法学部を志望しています。高校受験と違い、大学受験

僕はAO入試を視野に入れ、1年生の時から企業や団体が開催するイベントなど、校外活動に積極的に参加するようにしました。全国から高校生が集まるので、友だちが増えました。大人と話す機会もあり、視野も広がりました。そういった観点でも参加して良かったと思っています。もちろん、AO入試では高校の評定平均値も重要になるので、学校の勉強も頑張っています。

◎中学時代に基礎を頑張れば良かった

今振り返ると、中学校の最初で数学の基礎をもっと頑張っておけば、ここまで数学が苦手にはならなかったのではないかと思えます。小学校時代は算数が得意でしたが、中学校に入って授業がだんだん分からなくなって勉強から遠ざかってしまい、数学そのものが嫌いになっていました。基礎がないと上に積み上げられない教科なので、早い段階で苦手をつぶしておけば良かったのかもしれない。また、授業でもっと教養を教えてほしかったと思います。授業中の雑談でも、単に面白いことではなく、自分の視野が広がるようなことをもっともっと知りたかったです。

「共に学び合う」「1人で学ぶ」を 繰り返し、メタ認知能力を高める

1人で自律して学べるようになるには、どのような要素が必要であり、どうすればその力は育つのか。また、学力も意識も多様な生徒がいる中で、教師はどのように指導すればよいのか。

自律的学習の成立について研究をする京都教育大の伊藤崇達^{たかみち}教授に、ベネッセ教育総合研究所研究員の佐藤昭宏が聞いた。

自分の思考や行動の振り返りが 自律的学習では重要

佐藤 家庭学習習慣の定着は中学校教育の大きな課題の1つであり、生徒が家で机に向かえるように、先生方はさまざまな指導をしています。しかし、先生や仲間がいる環境なら勉強できるけれども、家で1人では勉強できないという生徒が多いようです。教育心理学では、このような学習課題をどのように捉えているのでしょうか。

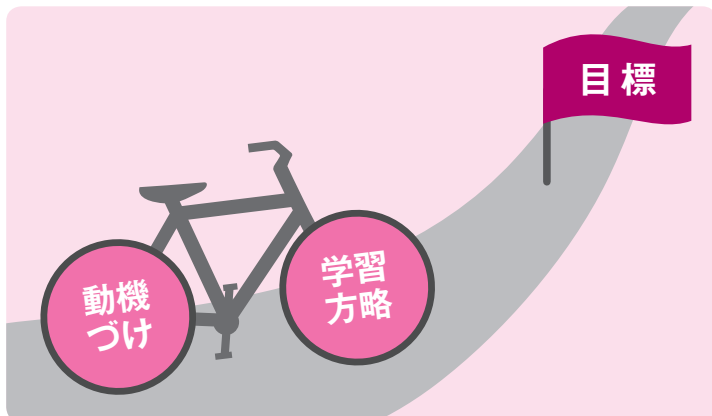
伊藤 1人で学ぶためには、目標、動機づけ、学習方略という主に3つの要素がどれほど確立しているかによると考えます(図1)。自分はどうなりたいという目標があっても、目標に向かって行動する動機づけがなければ勉

強はしませんし、動機づけをされていても、どうやって取り組むかの方略がなければ勉強のしようがありません。

1人では学べなくても、学校でみんなとなら学べるのは、確たる動機づけがなくても、友だちが勉強している教室の雰囲気があったり、先生が勉強方法をうまく導いてくれたりするからではないでしょうか。外発的にしろ、内発的にしろ、勉強しようと思う動機づけが弱い、または勉強方法が分からないために、家で1人になると勉強できないのです。

佐藤 では、家で宿題には取り組むけれども、それ以外の勉強はしないという生徒についてはどうでしょうか。指示された内容だけではなく、自ら勉強に取り組める生徒に育てたいと考えている先生は多いと思います。

図1 1人で学ぶための3つの要素の関係



1人で学ぶためには、目標、動機づけ、学習方略の3つの要素が必要
*伊藤准教授の示唆を踏まえ、ベネッセ教育総合研究所で作成

1人で学べる生徒を育てる

さとう・あきひろ◎中等教育領域を中心に、自律的な学習者を育てる教育および指導を研究。高度消費・情報化社会の中でいかに「学びの主体」を形成するかに関心を持っている。



ベネッセ教育総合研究所
初等中等教育研究室
研究員
佐藤昭宏

いとう・たかみち◎名古屋大大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程単位取得退学。専門は教育心理学、学習心理学。児童期から青年期にかけての自律的学習の成立について研究を行う。主な著書に『やる気を育む心理学』（北樹出版）、『自己調整学習の成立過程』（北大路書房）など。

京都教育大准教授 伊藤崇達



伊藤 宿題以外にも自ら学習するのは、学びに対して何かしらの動機づけがあるからです。この動機づけには自己効力感があることが鍵になります。勉強の成果が出たら「自分は勉強すれば出来る」、先生や保護者に褒められて「自分には能力がある」などと自信を持てれば、自分を勉強に向かわせる動機づけ

となります。自分にはその目標に到達できる能力があると考え、学習方略を立てて、実行できるのでです。

佐藤 成功体験を味わわせたり、努力や成果を見逃さずに褒めたりすることは、生徒の学習意欲を高めるために先生方もよく指導に取り入れるように思いますが、その意欲を1人で学び続ける力につなげていくためには、何が大切なのでしょう。

伊藤 最も大切なのは、メタ認知能力です。メタ認知とは、自分の思考や行動を客観的に把握し、認識することです。学習においてメタ認知がしっかり出来ていれば、学習の計画を立て、進み具合をチェックし、その結果を評価するなどして、学習を自分1人で調整できます。

このメタ認知能力は、小学校高学年から中学校初期の時期から高まっていきます。ですから、1人で学び続けられる自律した学習者となるために経験を積む時期として、中学時代は最適であり、重要なのです。具体的にいうと、例えば中学校に入ると定期考査が始まります。生徒は、試験日に向けて時間を意識しながら自分の学びをマネジメントすることを見ながら経験します。更に、テスト結果を見て、学習方法が適切だったのか、得点が悪かったら原因を振り返り、次の定期考査に向けて学習の仕方を考えます。このサイクルを積み重ねることでメタ認知能力が高まり、だ

だんと自律した学習者になっていくのです。

佐藤 なるほど。定期考査前以外にも、メタ認知能力を高めるために意識すべきことはあるのでしょうか。

伊藤 メタ認知能力は、人によって差があり、発達度合いもさまざまです。学習計画をうまく実行できない生徒は、自律した学習を行う土台となる生活習慣が確立していないことも考えられます。生活を自分で律せられなければ学習を律することも出来ません。学習計画と同時に生活習慣を見直すよいいと思います。

宿題も出し方の工夫次第で自律的な学びにつながる

佐藤 宿題によって生徒に学習習慣を付けようとする学校は比較的多いと思いますが、宿題の出し方で気を付けるべきことはありますか。

伊藤 生活習慣の定着についても同様のことが言えると思いますが、初めは強制であっても、周囲からの働き掛けや自己効力感によって、その価値を自分のものとして取り入れられれば、自ら行動するようになります。これにはいくつかの段階があり、前号で上越教育大の中山勘次郎教授が紹介されていた「内発的／外発的動機づけの段階モデル」(*)に沿って、説明することが出来ます。

宿題に、強制や罰を避けるといった消極的な理由（「外的調整」）で取り組むのか、それ

*【VIEW21】 中学版 2013 年 Vol.2 P.26-27 参照

とも、義務であり評価の対象（「取り入れ調整」）だから取り組むのか。生徒が宿題を自分の中にどう位置付けるかは、教師の働き掛けによって変わります。宿題を出す意味、学習する価値を説明することも有効でしょう。もちろん、1度の説明では取り入れられない生徒もいます。何度も語り掛けることが必要です。

更に、宿題を提出させて終わりとするのではなく、メタ認知をさせることも有効です。自分で採点して自己評価をするようにしたり、自分はどんなふうに宿題に取り組んだのか、良かった点や悪かった点を書かせて、次に向けて改善策を考えさせるのです。宿題の内容や学び方にまで踏み込んで振り返らせて、「宿題で成績が上がった」「効果的に勉強できるようになった」という実感を繰り返し味わわせることで自己効力感が高まり、「学ぶ」とは自分にとって価値があるものだ」（「同一化調整」となれば、後は自分1人でも学習に向かうようになるでしょう）。

佐藤 現在、私は中学生の学習指導に関する研究をしています。ここでは、認知心理学の知見を参考に、生徒に自身の学習の振り返りをしてもらっています。振り返りの質に問題があると感じています。なぜ間違えたのかについて、例えば「計算ミスなので、次は間違えないようにする」という振り返りで満足しては、なかなか学習の改善や効果には

つながりません。生徒の振り返りの内容に踏み込んだ指導が必要だと思います。

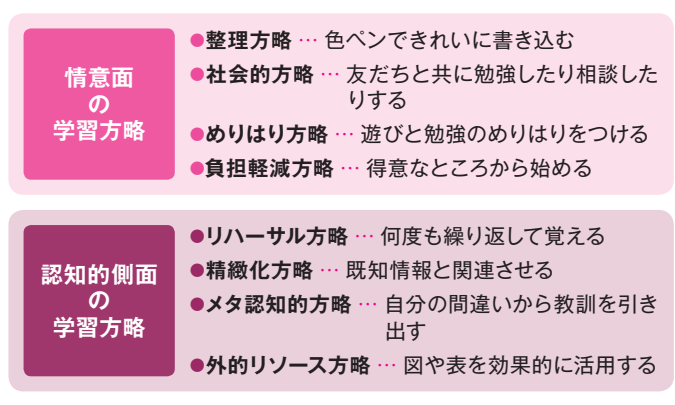
伊藤 「取り入れ調整」から「同一化調整」に達するまでには、心身共に発達の途上にある中学生にとってはとても時間が掛かることです。動機づけと併せて、学習方略への働き掛けを続けることが効果的です。英単語や漢字を覚える効果的な方法や復習しやすいノートの取り方など、学習方略のヒントを提示する。また、集中力を高める工夫や気持ちの切り替え方など、情意面のアドバイスを（図2）。方略は可視化しやすいので、支援の手立ても具体的に考えられます。こうして生徒に学びの見通しを持たせ、学習の実感や手応えを感じさせて自己効力感を高めることによって、同一化調整への道筋を立てていくのです。

「みんなで学ぶ」「1人で学ぶ」を繰り返しながら自律した学習者に

佐藤 中学校の導入期指導で、生徒との信頼関係の構築に力を入れる取り組みをよくうかがいますが、学習にはどのような影響がありますか。

伊藤 自ら学ぶ力を育む過程では、教師と生徒との信頼関係、クラスづくりも重要になると考えています。先ほどの宿題の話でいうと、教師と生徒との人間関係が出来ていなければ、生徒は勉強を強制されたと感じ、嫌々ながら取り組みます。しかし、信頼している先

図2 学習方略の具体的な内容



学習方略は、大きく「情意面の学習方略」と「認知的側面の学習方略」の2つに分けられる
*伊藤准教授の示唆を踏まえ、ベネッセ教育総合研究所で作成

生から与えられた課題なら「先生は自分のことを見てくれている」と受け止め、学びにも向かいやすくなると思います。特に中学生の初期は、教師や保護者が引つ張っていく場面がまだまだ必要です。しかし、思春期の生徒は心理的には微妙な段階にあり、頭ごなしに強制すると反発するでしょう。教師や保護者の言葉が生徒の心に届くには、人間関係の質が問われるのです。

佐藤 保護者や先生との関係と共に、クラスメートとの関係づくりについてはどうですか。

伊藤 メタ認知の過程では、他者を見て自分がどのような状態なのかに気付くことがよく

1人で学べる生徒を育てる



あります。友だちがどんな目標を持っているのか、どんな方法で勉強しているのか。冒頭で、学校でみんなと一緒に勉強できるけれども、1人では出来ないことが課題に挙がっていました。生徒が互いに学び合うクラスづくりによって、自ら学ぶ力の育成の場になることが出来ると考えます。中学生になると、生活の場は家庭中心から学校を中心にした仲

間関係へと移行していきます。学校で友だちと共に勉強することが生徒に与える影響は大きいはずですよ。

集団指導でありながら 個に応じた指導にもなる工夫

佐藤 学校事例で紹介した各校とも、生徒と教師の信頼関係を大切にし、グループ活動を取り入れていましたが、どのような点が印象に残りましたか。

伊藤 各校の取り組みを拝見すると、先生方の生徒に対する熱い思いが伝わってきます。生徒と教師との信頼関係では、富山市立速星中学校（P.10参照）で「無監督テスト」や無人販売など、生徒の自律性を育むことが伝統的に行われているのが印象的でした。自分を律する力は、毎日の生活や行事、部活動でも育むことが出来ますが、別の場面でも発揮できるようなことが重要です。そうした意味でも、さまざまな場面で自律性を養うことが、自ら学ぶ力につながると思いました。

グループ活動については、大仙市立西仙北中学校（P.6参照）のように、優秀なノートを掲示する、授業で他の生徒に教える時にノートを広げたままにすることも、学び合いの1つといえるでしょう。更に、同校は「1人勉強ノート」と枠をつくりながら、内容は自由にさせて、生徒が自ら進んで取り組むような仕組みにしています。集団指導でありな

がら、個に応じた指導になっています。

佐藤 先生が重要事項に挙げていたメタ認知を取り入れている学校もあります。

伊藤 短いサイクルでPDCAを回し、自律した学習を定着させようとしている多度津町立多度津中学校（P.14参照）の取り組みは、ユニークだと思います。毎日行くと「とにかく書いて出せばよい」と作業に陥りやすいのですが、グループ内で計画を見せ合うことや、毎週小テストを行って評価することなどによって、作業化を防ぎ、個別指導の側面を持たせています。

佐藤 生徒の学習を型にはめないことでは、東京都の鷹南学園（P.18参照）が「放課後自習室」などで地域の人々が生徒の学びを支援していました。第三者的な大人が入ること、学びの情報源が広がりますね。

伊藤 子どもはいろいろな他者とかかわりながら育ちます。そうした面から考えても、地域の人々との交流は生徒の自律を促すことにもつながるでしょう。また、保護者に他の家庭の学習支援の方法を伝えることも参考になる取り組みです。家庭学習は教師の指導が及ばない面もあるので、こうした保護者への支援も重要です。

子どもが自立し、自律するためには、さまざまな工夫が重要です。そして、時間が掛かります。教師や保護者が地道に支援し、見守り続けることが必要なのです。

豊島区立千川中学校の遠藤純子先生は、昨年、担任のクラスで「生命の尊重」をテーマに道徳の授業を行った。生徒には、事前学習として祖父母への聞き取り調査を課した。祖父母の子ども時代の様子や時代背景、子育てへの思いなどを聞くという、自分のルーツをたどる内容だ。

東京都豊島区立千川中学校

調査結果は生徒個々で「デジタル紙芝居」にまとめた。学習ボランティアが用意したプレゼンテーションソフトのフレームに必要な情報を書き込み、スライドショーにするもので、生徒は1人1台のタブレットPCを使い、読みやすい文字量、内容にふさわしい書体や色を選び、時にはイラストや写真を入れて表現していった。作成したデジタル紙芝居は、班内で発表して感想を述べ合い、友だちの受け継がれてきた命も感じる場を設けた。その上で、道徳の副読本

を読み、遠藤先生が自身の体験談を語った。生命の神秘について問い掛けると、生徒からは「その歩みが未来の自分をつくっていくのだと感じた」など、授業テーマの本質を突くような意見が次々と上がった。

「この授業では、21世紀型スキル（*）の中の『コミュニケーション』『情報リテラシー』『個人と社会における責任』などの育成をねらいとしました。デジタル紙芝居の発表によって活発なコミュニケーションが生まれ、驚いたことに不登校気味の生徒も授業に積極的に参加していました」

学力に関係なくICTで創造力を発揮

千川中学校は、2011年度に「ICTを活用して子どもたちの21世紀型スキルを育成する実証・研究事業」の指定を受けた。これは、東京大、日本マイクロソフト（株）、レノボ・ジャパン（株）、豊島区教育委員会の共同研究事業で、同校にはタブレットPC40台、Microsoft Office[®]、無線LAN、ICT支援員などの環境が整備され、これらを活用しつつ21世紀型スキルを育成するという研究に取り組んだ。小林豊茂校長は事業参加のねらいを次のように語る。

「21世紀型スキルはこれからの日本を担う生徒に必要な力です。未来を生き抜く力を生徒に育みたいと思うと同時に、授業で自由にICTを使える環境を整えて、先生

21世紀型スキル育成に タブレットPCを活用

2011年4月、文部科学省が公表した「教育の情報化ビジョン」では、

2020年度に向けて実施する施策の1つに

子ども1人1台の情報端末による教育を本格展開させることの検討を挙げた。

ICTの活用で、どのような指導が可能となるのか。

2年前に1人1台のタブレットPCなど

ICT環境を整備した学校の取り組みから考える。

School Data



東京都豊島区立千川中学校

◎ 1947（昭和22）年開校。21世紀型スキルの育成を図る実証研究に実践校として参加し、デジタルを活用した教育活動を推進している。

校長 小林豊茂先生／生徒数 263人／学級数 10学級（うち通級指導学級2）／所在地 〒171-0042 東京都豊島区高松1-9-21／TEL 03-3956-8171 URL http://toshima.schoolweb.ne.jp/senkawa_j/

*世界の教育関係者が立ち上げた国際団体「ATC21s」が提唱する概念で、グローバル社会を生き抜くために必要な力を指す。4つのカテゴリーに分けられた10項目から成り、創造力とイノベーション、コミュニケーション、情報リテラシー、個人と社会における責任などがある



豊島区立千川中学校校長

小林豊茂

こばやし・とよしげ 「生徒の将来を見据え、教育実践と研鑽に励みたい」



豊島区立千川中学校

林謙太郎

はやし・けんたろう 3 学年担任。数学科。「生徒の探求心や創造性を伸ばす支援をしたい」



豊島区立千川中学校

遠藤純子

えんどう・じゅんこ 教務主任。理科。「生徒の行動や気持ちをありのままに受け入れる」



写真 理科の実験で、班ごとにタブレットPCを利用。お互いの考えを出し合いながら、実験結果の予想や結果を比較することを通して、協調的な問題解決力の育成を目指す

方の授業力をより高めたいと考えました」

ICT環境が整備されたからといって、いきなり全授業で最初から最後までICTを使うような授業が行われるようになったわけではない。自分の意見をタブレットPCに書き、それをグループで見ながら話し合ったり、理科の実験の様子をデジタルカメラで撮影して、考察に生かしたりと、ICTは指導の内容に応じてスポット的に活用する。それでも、1人1台のタブレットPCが使えることで生徒の集中力が増すと、3学年担任の林謙太郎先生は評価する。

「円を使った数学の問題を作成する授業を行いました。問題作りの条件は、自分が解けることと他の生徒に解説できることです。『創造力とイノベーション』や『情報リテラシー』などの育成がねらいでした。生徒は数学の問題作りに苦労していました。意欲的に取り組んでいました」

「創造力とイノベーション」の育成は、

授業だけではなく特別活動でも行われている。現3年生は、昨年、尾瀬移動教室の事前・事後学習で、後輩が活用できるようにと尾瀬に関するデジタル教材をグループで作成した。今年は、京都・奈良の修学旅行に行く前に、1人ずつ京都・奈良の名所を分担し、インターネットで調べ、各2ページでまとめた案内冊子を作成した。

「今年の冊子を見ると、去年のデジタル教材よりも、創造力や表現力が数段階レベルアップしています。配色や書体、色などを工夫して表現しており、どのページをとっても同じものがありません」(林先生)

1年生の頃は教師が示した見本と似たような表現をしていた生徒たちだが、タブレットPCの操作法を覚え、友だちの作品を見るうちに、徐々に創造力が高まり、個性豊かな作品を作るようになっていった。

「手書きでは文字や絵の上手・下手が目瞭然です。ICTを使えばそのことを気にせずに自由に表現できるので、生徒は作成に没頭できるようです。良い作品が必ずしも学力の高い生徒のものとは限りません。学力にかかわらず、創造力が伸びるのを実感しています」(小林校長)

ICTによって指導の幅が広がった

今回の共同研究事業によって、教師の指

導の幅も広がったと、林先生は言う。

「以前は、授業に生徒一人ひとりがパソコンを使う場面を入れたらと思うたら、パソコン教室で授業をせねばならず、他クラスとの兼ね合いもあり、制約がありました。それが今は、普通教室でも1人1台のタブレットPCを使えるようになり、指導ツールの1つとして選択肢に入れています」

だからといって、授業そのものが大きく変わったわけではない。教師もさることながら、生徒のICTスキルもばらばらだ。そこで、クラスの中でもパソコンが得意な生徒数人を学習係に任命し、その生徒が班内のICTに関する教師役となりながら活動を進めている。

「学習目標に到達するために、目の前の生徒にとって最も効果的な手法を取るという授業の根本は同じです。黒板に大型テレビ、タブレットPC、パソコン教室など、どの場面で何を使うと効果的なのか。選択肢が増えたからこそ、教師には授業の工夫がより求められるのではないのでしょうか」(遠藤先生)

子どもが、ICTを活用して21世紀を生き抜く力を身に付ける。そのために、教師にとって必要なのは、ICTをうまく生かせる指導力である——ICTに詳しい教師が決して多くない同校が研究を進めてきた成果が、その重要性を示している。



ミドルリーダーの挑戦
—前へ! 前へ!!

生徒一人ひとりの内面に寄り添い続け 個々の良さを伸ばしていきたい

大分県豊後高田市立高田中学校 **堀之内健治** 33歳



Middle Leader

ほりのうち・けんじ◎教職歴10年。2年間講師を務めた後、大分市立王子中学校、宇佐市立宇佐中学校、宇佐市立西部中学校に勤務し、2013年度、同校に赴任。担当教科は数学。1学年担任、1学年生徒会担当、バスケットボール部顧問。

これまで私が歩いてきた道のり

「押し付け」の指導が
生徒から拒絶され
苦しんだ新任時代

私の父は中学校の教師で、バレーボールの指導で全国的に名が知られている存在でした。同じように中学校教師の道を選んだ私は、当時の生徒が持っていた「緩さ」に対して、授業でも部活動でも「ビシッ」と指導しようと思いました。

ところが、私は生徒のためにと思って指導をしているのに、生徒は思うように動いてくれません。それほどばかりか、新年度の担任発表で私の名前が呼ばれた瞬間に「えーっ」と

いう声が一斉に上がった。顧問を務めるバスケットボール部では遠征をボイコットされたりと、何度も苦しい思いをさせられました。いったいどう指導すればよいのか……。悩んでいた私は、ある先輩から「厳しいのはいいんやけど、生徒に受け入れられていないぞ」と言われたのです。

今思うと、私は自分の理想を生徒に押し付けようとしていたのではありません。よく言えば理想に燃えていたのですが、実際は生徒の内面に思いが及ばず、自分勝手に描いた生徒像に無理やり近づけようとしていただけなのだと思えます。

生徒との接し方を模索するうち

に、教科指導も生徒指導も部活動の指導も、基本は同じであることに気がきました。担当教科の数学で言えば、最初に公式や解法を教えなければ問題が解けるようになりませんが、教え込もうとして問題をやらせ過ぎると、生徒が数学を嫌いになっってしまう恐れがあります。部活動の指導でも同じで、基本的な技術の習得は欠かせませんが、その練習だけでは競技の面白さが伝わりません。かといって、テストや試合は待ってられませんから、ゴールをイメージして段階を踏まえて指導する必要があります。

当初は少しでも早く完成形に近づけようとするあまり、無理に基本を教え込もうとして失敗し、生徒の心が離れていってしまいました。数学やバスケットの「楽しさを伝える」という視点が抜け落ちていたのです。

そうした失敗を繰り返すうちに、徐々に生徒の反応が目がいくようになります。そして、生徒が、何を思い、考え、感じ、どこにつまずいているのかということを考えながら、「今はまだ、これが出来なくて大丈夫」と、心に余裕を持つて指導できるようになりました。

心に寄り添えれば 話を聞くだけでも 生徒を変える力を持つ

自分の思いではなく、生徒の思いを大切にした指導が少し出来るようになったのは、20代最後の頃です。

自分が言いたいことだけを言い、授業を乱す生徒がいたのですが、その生徒を3年生の時に受け持つことになりました。私は、生徒は大人から認められていないと感じているから、そのようなことをするのだと考え、生徒の話を何でもことん聞くことに決めました。

今、私が踏み出そうとしている新たな一歩

一人ひとりの内面を見つめ 集団の中で輝いて成長する チャンスをつくりたい

学校でしか出来ない指導として大切にしているのは、集団生活を送る中で、思いやりの心などを育て人間性を高めることです。

そのために力を入れているのが、学級づくりです。生徒たちは、体育

初めのうちは、授業、朝の会、給食、掃除、学活などでも、まだ自分勝手な発言がありました。それでも根気強く、その生徒の発言を聞き続けると、数か月が経った頃、明らかに言動が変わってきました。次第に落ち着いて授業に臨むようになっただけでなく、リーダー的資質が開花し、学級行事などを引っ張る存在になったのです。進路相談でも、生徒は心を開いて本音を話してくれました。

生徒の心に寄り添うことが出来れば、生徒は伸びる、変わるということを、私はこの経験から学びました。

大会や合唱大会などさまざまな行事を通して、友だちと力を合わせて1つの目標に向かっていくという経験を積む中で、満足感や達成感を得ます。その経験は人間的な成長をもたらすと共に、生活面や学習面の向上につながっていくと思います。

一体感のある学級をつくるためには、担任が「こんな集団をつくりたい」という明確な目標の下、生徒と

同じ目線に立って活動する熱意が必要だと思っています。しかし、あくまでも生徒が主役で、生徒自身に決めさせることを大切にしています。

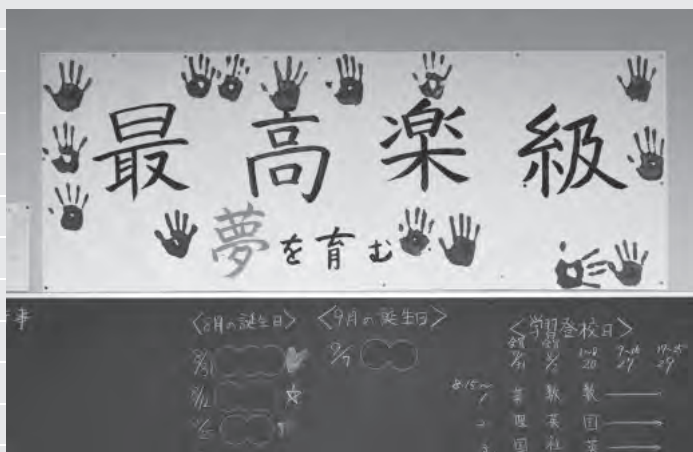
生徒を集団の中で育てるためには、教師が生徒一人ひとりの良いところを積極的に探し、学級の中で輝く場面をつくることも大切です。生徒の個性や気持ちによって目指すゴールは異なりますから、常に一人

ひとりの内面を見つめて、「この生徒には、どのように成長してほしいか」という視点を持つようにしています。しかし、そのような指導をするための知識や経験は、まだまだ私には十分ではありません。先輩の指導を参考にさせていただきながら、これからも生徒一人ひとりのつながりを大切にする中で学んでいきたいと思っています。

堀之内先生の取り組み

学級づくり

◎学級に一体感を生み出すためには、クラスメートで目標を共有することが不可欠だと思います。生徒が話し合っ学級目標を決め、みんなで協力してポスターを作ってもらいました。そして、学校行事などの節目節目で生徒に語り掛け、学級目標を確認し、方向性を共有して取り組めるように指導しています。



学級目標のポスターは、一人ひとりに「自分のこと」として意識してもらうために生徒の手形を入れ、黒板の上に掲示している

2013 Vol.2 「生徒の心に火をつける」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

※「VIEW21」中学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト(<http://berd.benesse.jp>)でご覧いただけます。

◎特集の記事では、生徒の心に火をつけるための解決の「糸口」のポイントが押さえられ、「見取り」が見えました。ぜひ意識して取り組みたいと思ったのは、中1ギャップと関連付けた、中学校スタートの指導のあり方と定着のさせ方です。それが充実すれば、きっと「当たり前」が習慣となり、定着し、自分で課題を見付け、自分で歩む「個立した子ども」に成長すると思います。指導の鍵は「1年生のスタートと定着。それを2年生でどう評価し、習慣化の道へ歩ませるか」です。 [岩手県/K中学校]

◎本校でも生徒に「自己肯定感」や「自信」を持たせるための教育活動に日々悪戦苦闘しています。生徒の根っこ部分を耕し、育てることによって、主体的に言語活動に取り組みさせることが出来ると思います。まさに時機を捉えた特集であったと思います。 [福島県/I中学校]

◎三重県四日市市立楠中学校が行っていた、大きな行事の後に生徒会役員が校長室を訪れ、成果報告をするという活動が良いと思いました。生徒会役員が校長に報告する活動を通して、学校行事への評価・改善を図ることは、リーダーの育成の観点や自信を持たせる上でも重要なことです。本校でも実践しようと思います。 [埼玉県/F中学校]

◎上越教育大の中山勸次郎教授の記事では、特に内発的動機づけ理論がとても参考になりました。人が「学び」に対する主体性を獲得するまでの段階を意識しながら生徒を観察したり、学習を指導したりすることは、どの教

師にも不可欠なことであると感じました。「経験と自信の不足」からくる無気力・無意欲な児童・生徒に対する指導の重要性を改めて痛感しました。 [東京都/K中学校]

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」の愛知県岡崎市立翔南中学校の加藤政幸校長の記事には、「全ての責任は私が取ります」という当時の校長の言葉に職員室の空気が明らかに変わったことが描かれており、校長や先生方の思い、状況が手に取るように感じられました。校長のその言葉こそが「職員の心に火をつけた」のだと思いました。 [島根県/K中学校]

◎小学校で英語の学習が充実してきている今こそ、小中の連携をもっと大切にして、中学校での英語教育の充実につなげていくべきだと思います。小学校の学習内容や実態をよく知らない中学校教員も多いので、「Benesse 発 これからの教育」の岐阜県多治見市立笠原中学校のように、小学校からの指導を引き継ぐ体制づくりが必要だと思います。 [富山県/F中学校]

◎「ミドルリーダーの挑戦」で紹介された、スーパーティーチャーとして活躍中の佐賀県吉野ヶ里町立三田川中学校の吉田喜美子先生と自分自身、ずいぶん差はありますが、同性で年齢的に近いこともあり、共感する部分が多くありました。校長先生の「子どもたちのためになると信じるなら、何でも積極的に取り組みなさい。そして、自分自身も勉強をし続けなさい」という言葉で、子どもたちのためになるから頑張ることが出来ることを実感しています。 [北海道/K中学校]

上智大学・ベネッセ英語教育シンポジウム
開催のお知らせ

これからの英語の指導と学びを考える

—全国の高校入試分析結果と中高生の英語学習実態をもとに—

中学校や高校の英語教育をテーマに考えていきます。

指導事例のご紹介、ご参加の先生方との意見交換も予定しています。

日時 **2013年12月1日(日)**
10時30分～17時(予定)

場所 **上智大学四谷キャンパス**

参加費無料
事前申込不要

詳しくは

<http://www.arcl.jp/>

* ARCL(アークル、Action Research Center for Language Education)は、ベネッセ教育総合研究所が運営する英語教育研究会です

編集後記

今号から「VIEW21」中学版を担当することになりました、小林と申します。昨年度までは「VIEW21」高校版の担当で、中学校領域は初めてとなります。中学校現場の課題を掘り下げ、解決の手掛かりとなる取り組み事例のご紹介や、先生方と共に解決策を考えていくと同時に、高校現場の視点も取り入れた誌面展開なども出来ればと考えています。ご指導ご鞭撻のほど、なにとぞよろしくお願い申し上げます。
ベネッセ教育総合研究所 情報編集室「VIEW21」中学版編集部 小林奈緒

VIEW21 中学版 2013 Vol.3

2013年11月13日発行/通巻第319号

発行人 岡田晴奈
編集人 谷山和成
発行所 (株)ベネッセコーポレーション
ベネッセ教育総合研究所

◎お問い合わせ先

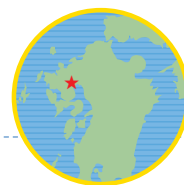
情報編集室
〒206-8686
東京都多摩市落合1-34
電話 042-311-3390

印刷製本 凸版印刷(株)
編集協力 (有)ペンダコ
執筆協力 中丸満、二宮良太、横堀夏代
撮影協力 荒川潤、川上一生、南弘幸
イラスト協力 カモ、幸剛

©Benesse Corporation 2013

色とりどりの学びの情景

夢を育み、かなえる力を



表紙の学校 佐賀県小城市立牛津中学校



夏休みには3日間の職場体験を実施。2年生95人が幼稚園、高齢者施設、飲食店、小売店など35の事業所で「働く」ことにチャレンジ。体験前にはハローワークの講師から礼法指導の講習会を受けた



「看護・リハビリ体験」では、地元の病院から医師の指導の下、看護師や作業療法士ら約10人が来校。生徒は実地体験を交えながら、医療の仕事について学んだ



図書室に進路コーナーを設置。職業に関する本が約300冊そろい、新聞の切り抜きも充実している

小城市立牛津中学校は、2013年度からキャリア教育の体系化を進めている。1年生では農業体験で勤労観を育み、2年生では地域の事業所での職場体験で職業観を広げ、3年生では高校の体験入学を通して卒業後の進路を考える。これらの取り組みに厚みをつけ連続性を持たせて、将来の自分を考え、目標に向けたステップを見通した上で、今の自分に何が必要なのかを考え、行動できるような生徒を育てることが目標だ。

進路指導部を校務分掌として独立させ、3年間を見通した進路学習の計画・推進、進路情報の蓄積を行い、進路実現を支える学力向上のために1～3年生の実力考査を全面的に見直し、面談などでデータ分析に基づく指導を始めた。すると、実力考査の結果を見て苦手を克服しようと前向きに頑張る生徒や、高校入試に向けた意識の変化が3年生で例年よりも早く見られたという。キャリア教育の充実に向け、教師の挑戦は続く。

過去1年間の
特集テーマ

Back Number

2013

Vol.2 生徒の心に火をつける

Vol.1 主体的に取り組む言語活動の工夫

2012

Vol.4 中学1年生の良さを伸ばす

Vol.3 「自律的な学習者」を育てる学び方指導

すべての記事をウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

<http://berd.benesse.jp> または で

次号 Vol.4 は 2014 年2月中旬発行(予定)です